

## 明治期の雑誌に載ったイソップ寓話 補遺

吉見 孝夫

### 一 前稿の補足

日本におけるイソップの受容過程を考究するための基礎資料として、先に明治期の雑誌に載ったイソップ寓話を拾い集めた結果を公表した<sup>注一</sup>。前稿発表後、それに漏れた事例をいくつか見出したので、ここに補いたい。

前稿では、明治中期にはイソップの名が一般に浸透していったことをいくつかの事実をもって示したが、その後新たに知った事例がある。それをまず示しておこう。

前稿で、新作の動物寓話を「新イソップ」と称することが半ば慣習化していることを指摘した。この意味の「新イソップ」が文献に現れるのは明治二五年三月の佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』（博文館）を最初としたが、そのほば一年前にも使用例があった。同じ博文館発行の雑誌『日本之少年』の第三巻第五号（明治二四年二月一五日）・第六号（明治二四年三月一五日）に「新しいそつぷ物語」のタイトルで創作動物寓話が載っている。

明治六年の『通俗伊蘇普物語』から二〇年足らずで、「イソップ」の名が動物寓話の代名詞となる程に知れ渡っていたことを証するものである。同じ意味で「今イソップ」とする例もある。井上幸一『明治大諷刺 増補文字反古』

（王道雑誌社、明治三四年一月）に「明治今伊蘇普物語」（目次では「明治伊蘇普物語」というタイトルで明治の世相を色濃く反映した動物寓話を載せている。

また明治二九年一月の『面白草紙』第八号（雷笑社）にイソップと嘘とをかけて「ウソップ物語」とする笑話がある<sup>注二</sup>。これもまた読者がイソップの名を知っていると想定しているからこそ成立する話である。

明治期にイソップ寓話を掲載する雑誌を時系列で示すと以下ようになる。明朝体は前稿で明らかにした雑誌、ゴシック体はこの小論で指摘する雑誌である。

明治一八年（一八八五）

『ROMAJI ZASSHI』第一〜七号

一九年（一八八六）

『ROMAJI ZASSHI』第八・一〇・一二〜一六・一九号

二〇年（一八八七）

『ROMAJI ZASSHI』第二一・二二・二五号

『教育小供のはな誌』第三〜六号

二一年（一八八八）

『DOSHISHA 文学会雑誌』第一三三号

『女学雑誌』第一三六号

二二年（一八八九）

『女学雑誌』第一四四・一五九号

『小国民』第一号

二三年（一八九〇）

『こども』第二卷第一・二・四号 第八〇一〇号

『小学生徒之友』第九・一七・二四号

『少年園』第四六号

『女学雑誌』第二四三三三

二四年（一八九一）

『女学雑誌』第二四七・二五五号

『こども』第一一〇一三三

『幼年雑誌』第一卷第三・六・一四号

『小学生徒之友』第四〇・四五・四七号

二六年（一八九三）

民友社系『家庭雑誌』第一六・二〇号

『花の園生』第三四・三五号

二七年（一八九四）

『少文林』第二卷第五号

三〇年（一八九七）

『少年新誌』第二・四号

三四年（一九〇一）

『婦人と子ども』第一卷第七号

三五年（一九〇二）

『羽陽之少年』第六号

三六年（一九〇三）

『万年艸』第四・五卷

『婦人と子ども』第三卷第二・一二号

『福音新報』第四〇五号

由分社系『家庭雑誌』第一・二二二

三七年（一九〇四）

『婦人と子ども』第四卷第一・二・四・八・一〇・

一一号

『帝国文学』第一〇号

『をんな』第四卷第一一

三八年（一九〇五）

『婦人と子ども』第五卷第五・六・一一号

『新古文林』第一卷第一・三・五号

『をんな』第五卷第八号

『少女智識画報』第一・三三

『少年智識画報』第三・四・六号

三九年（一九〇六）

『婦人と子ども』第六卷第二・九号

『少年智識画報』第八号

四一年（一九〇八）

『婦人と子ども』第八卷第六号

四二（一九〇九）

『英語之日本』第二卷第一・一一・一三三

四三年（一九一〇）

『英語之日本』第三卷第七号

## 二 雑誌の概要と掲載話

新たにわかったイソップ寓話を収めた雑誌の概要とその掲載話を示す。寓話の中には、改作、翻案の程度が甚だしく、一読してはイソップと無縁に見えるものもあるが、イソップに基づく判断される例はここに採った。イソップ寓話の範囲は、Ben Edwin Perry の *Aesopica* (University of Illinois Press, 1952) に含まれるものの他は、明治期までに日本に入っていた以下の文献に所収の寓話、イソップ伝に限った。

『エソポのハブラス』(ESOPO NO FABVLAS)

仮名草子『伊曾保物語』

Robert Thom『意拾喻言』

Thomas James: *Aesop's Fables*

George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*

Charles Stickney: *Aesop's Fables*

タイトルの下の括弧内に「A 17」等としたのは *Aesopica* の寓話番号である。「アリとキリギリス」で知られる寓話に該当するのは *Aesopica* では二話あり、二つの番号(112・373)を併記した。挿絵のある場合は、括弧内に「絵」と記した。

調査した結果は、前稿で判明したものを含めて、末尾に表としてまとめた。

### 『教育小供のはな誌』

東京の幼談社という出版社から週刊で発行された尋常小学校生向け教育雑誌。「持主兼編輯人 山村亮作」と

あるので、社主の山村が自ら編集に当たったのであろう。「大売捌所」として東京市内の五つの書店名が載る。主に東京周辺で読まれたものと思われる。山村については詳らかにすることができない。筆者は第三号から第五号までしか目にすることができなかった。第三号が明治二〇年九月三日発行であり、週刊なので同年八月創刊と推定される。

以下のような寓話が掲載されている。

第三号(明治二〇年九月三日)

1 「●御殿の鶯と藪鶯の話」(A 352)(絵)

第四号(明治二〇年九月一〇日)

2 「●無分別なる亀の話」(A 230)(絵)

3 「○尾なし狐の話 富士見の里人君」(A 17)

第五号(明治二〇年九月一七日)

4 「●蟻といなごの話」(A 112・A 373)(絵)

第六号(明治二〇年九月二四日)

5 「○蜻蛉と蟻の話 紀伊 山本 投」(A 112・373)

1 は藪鶯が御殿の鶯をうらやましがる一方、御殿の鶯は藪鶯に、御馳走にはありつけるが、不自由だと自身の身をかこつ話。「田舎の鼠と町の鼠」(A 352)に似る。しかし登場動物が大きく異なるだけでなく、田舎の鼠が危険な町の生活より田舎の気まま暮らしを選ぶという原話とは趣旨が大分違う。また「世に富たる人や、貴き人は、何も不足はないようなれど、心の苦勞は、なか／＼多いことであります。されば何人も、適當の満足と云ふことが、大切であります(ママ)」という教訓を加える。

支配層には支配層の精神的負担があるのだから、「足るを知れ」と説くに至っては、「恐怖を我慢しながら快樂におぼれるよりは質素で平和に暮らす方がよい」(シャンプリ版に拠る塚崎幹夫訳<sup>注三</sup>)という原話の教訓とは大きく隔たる。このようにイソップに基づくものもためらわれるほどだが、かく変貌させてまで旧来の徳目に合わせる形でイソップを取り込んだとするならば、受容史のうえで注目すべきであろうと考え、ここに取り上げた。

2は亀が二羽の鶴に棒をくわえてもらい、その棒をくわえて空を飛ぶが、子供たちの悪口に腹を立て、つい口を開き落ちてしまう。「亀と鷺」(A<sup>230</sup>)に似るが、日本風に鶴と亀の組み合わせにしたか。話柄は亀自身が落ちる原因を作ってしまう点で、原イソップとは大きく異なる。イソップ由来と断定するにはいささか躊躇を感じるが、1同様の理由でここに収載した。なお、本誌本号の鈴木潤吉論文<sup>注四</sup>を参照していただきたい。

5は働き者の「蟻」と怠け者の「蜻蛉」を対比させて、勤勉を説く訓話である。寓話になっていないが、イソップ寓話を踏まえて徳目を説く初期の例として挙げておく。「投」は投稿の意。「ます」を使った口語文。

5を除き、いずれも文体は文語体だが、3の会話は「です・ます」を使った敬体の口語文。3の訳者「富士見の里人」について知る所は何もない。

### 『小国民』

東京の学齢館から発行された児童雑誌。明治二二年七

月創刊で、児童向け雑誌としては最初期といえる。石井研堂(一八六五―一九四三)編集。明治二八年九月まで続く。第一号に以下の寓話が載る。

第一号(明治二二年七月一〇日)

「鼠<sup>ねづみ</sup>の国会」(A<sup>613</sup>) (絵)

鼠が猫の首に鈴を付けることを議論する、よく知られている話である。文語体を用いている。舞台を鼠の国会に置く。国会開設の勅諭が出されたのが明治一四年一〇月であり、明治二三年に開設されることは既に決まっていた。翌年の帝国議会開設を控えて、国民の注目を集めていたことであろう時事を織り込んだ工夫である。なお本文中の「国会」「代議士」という語は、議会開設以前の明治初頭から使われており、新語ではない。

### 『こども』

東京の少年園という出版社から発行された児童向けの月刊雑誌。編輯人榊信一郎。これに以下のイソップ寓話が掲載されている。榊には少年向け学習書の著作がある。

第二巻第一号(明治二三年二月二八日)

1 「むぐらの児(図入)」(A<sup>214</sup>) (絵)

第二巻第二号(明治二三年三月)

2 「蝶<sup>てつ</sup>と蟻<sup>あひ</sup>」(A<sup>112・373</sup>)

第二巻第四号(明治二三年五月三十一日)

3 「汝に出づるものは汝にかへる。」(A<sup>426</sup>) (絵)

第八号(明治二三年九月三〇日)

4 「獅子<sup>しし</sup>と黒奴<sup>くろんぼ</sup>」(A<sup>563</sup>) (絵)

第九号(明治二三年十一月一九日三十一日)

5 「樵夫と山の神（画入）」（A 173）（絵）

6 「猫と猿（画入）」（Aesopica にはない。Stickney 本

8 The Monkey and the Cat と同話）（絵）

第一〇号（明治三年二月一九日）

7 「鼠の会議（画入）」（A 613）（絵）

第一一号（明治四年一月一九日）

8 「蛙と鼠（画入）」（A 384）（絵）

9 「犬と影（画入）」（A 133）（絵）

第二二号（明治四年二月一九日）

10 「狼の失望。（画入）」（A 158）（絵）

11 「蚤と虱の競走。」（A 226）

第一三号（明治四年三月一九日） 刊記は綴じ込まれ

ていて確認できない）

12 「蝙蝠の心変り」（A 566）

13 「尾無し狐」（A 17）

巻号については不明の点がある。第二巻六号の翌月に刊行されたのでは「巻」がはずされ、「第七号」となり、以下通号で記される。これは年が改まっても変わらず、筆者が確認した範囲では明治二五年二月発行分が「第二五号」となっている。通常通号にするならば、第一巻から数えるはずだろうが、今見たとおり第二巻からの号数でカウントされている。実は第二巻第一号とした号は、神奈川近代文学館所蔵本では確かに「第貳巻第壹號」とあるが、国際児童文学館所蔵本では「第壹巻第壹號」とある。他の文字面は全く同じなので、ここだけどちらかが活字を埋め直したわけである。このように巻数には疑

間が残るが、この号より前に発行された号が確認できず、翌月以降の号では「第貳巻」となっているので、第二巻としておく。

内容に概ね改変は少ないが、8はウサギとカメの話で、登場動物を変えている。1・6・7は文語文で、会話場面だけは口語文。他はすべて「です・ます」を用いた敬体の口語文。

『小学生徒之友』

横浜の横浜文社から月二回発行された、尋常小学校生、高等小学校生向けの学習雑誌。明治二二年一〇月五日創刊。第一七号に二話のイソップ寓話を載せる。「発行兼編輯人」は小櫃守衛。小櫃には漢文学習書の著作がある。また明治四一年頃には神奈川県立第一中学校の教員をしている。

第九号（明治二三年二月五日）

1 「〇熊と旅人（前号ノつゞき）」（A 65）

第一七号（明治二三年六月五日）

2 「〇蟻トきりぐすトノ話 青木幸太郎君寄贈」（A 112・373）

3 「〇ころバナさきノまへづゑ 野島市三郎君寄贈」（A 224）

第二四号（明治二三年九月二〇日）

4 「●あんどろーくるすト獅子トノ奇話 土屋大次郎君寄贈」（A 563 a）

第四〇号（明治二四年五月二〇日）

5 「英語独習 READING LESSON. The wolf and the



goat.」(A 157)

第四五号 (明治二四年八月二〇日)

6 「●ぼんち画解」(A 124)

7 「英語独習 READING LESSON. THE DOG IN

MANGER」(A 702)

第四六号 (明治二四年九月五日)

7 「英語独習 READING LESSON. THE DOG IN

MANGER(Continued)」(A 702)

8 「THE VIPER AND THE FILE.」(A 63)

第四七号 (明治二四年九月二〇日)

8 「英語独習 READING LESSON. THE VIPER AND

THE FILE(Continued)」(A 93)

1 は「前号ノつゞき」とある。第九号に前号である第八号の「目録」が記されている。それには確かに「熊と旅人」が含まれている。しかし現在のところ、第八号を確認するに至っていない。2・3・4の「寄贈」は投稿の意と思われる。

この雑誌は、漢字・片仮名・平仮名を特異な形で併用する。一見無秩序のようだが、片仮名は、ほぼ助詞・助動詞・活用語尾に限られる。また、助詞・助動詞・活用語尾はほぼ片仮名書きされる。これは、漢字片仮名交じり文の片仮名の使用範囲と同じである。つまり、通常の漢字片仮名交じり文ならば漢字書きされる箇所の一部を平仮名で書いているのである。恐らく読者の漢字理解力を考慮して、難解な漢字使用を避けたのであろう。また、通常漢字の右傍に付される振り仮名を下に割り注の形で

付けるのも余り例がない。1〜4は敬体の口語文で書かれる。6は殆ど独白で、常体の口語文。

5・7・8は英文とその訳文が左右で対照できるように配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。この発音ルビは、besides に「ジャイズ」、is に「イズ」と振って、「ヅ」と「ズ」を使い分けたり、stable に対し「ステーブル」と小文字で子音だけを示したりといった工夫が見られる。当時の英語教育を知るうえで興味深いのが、次節の「本文」では省略する。訳文は文語体。7・8の訳文は当時英語教育で用いられた「直訳」である。「直訳」とは極端な逐語訳と機械的な移し替えを特徴とし、あたかも出来の悪い自動翻訳のような日本語を産み出す。

#### 『少年園』

少年園を発行所とする、明治二一年一月創刊の日本最初の本格的少年雑誌。山県悌三郎(一八五九〜一九四〇)を主幹とする。発行所が同じである『こども』よりは読者年齢が高い。イソップ寓話は一切掲載されていないが、イソップの伝記が掲載されている。

第四六号 (明治二三年九月一日)

「イソップの事を記す。医学士、関場不二彦。」(イソップ伝)

関場不二彦(一八六五〜一九三九)は、東京帝国大学医科大学を卒業し、北海道医師会の初代会長となった、北海道医学界の先駆者である<sup>注五</sup>。明治二三年当時は同医科大学で御雇外国人スクリバの助手であった。本文中

に「今を距ること七年」とか「歳月を関すること僅か六七星霜」とあるので、明治一六、一七年頃、二十歳前の文章となる。「レイベン (Leben)」「フラーケル (Orakel)」「レフレックスビルド (Reflexbild)」などのドイツ語を使い、「レッシング」「マルチン・ルーテル」の名を出すことからして、ドイツ語から翻訳したものと推定される。関場は明治一一年から里見義直に就いてドイツ語を学んでいる。孔子や莊子の名を引くのは関場の付加である。イソップの漢字表記は近世は「伊曾保」、明治期は「伊蘇普」が通例で、中国では「意拾」「伊娑菩」が見られる。それを関場は「以蘇菩」という他に例を見ない表記を用いる。文体は文語体。

この関場のイソップ伝に続いて「盤峰樵者」なる人物による五二字の漢文が載る。寓話でもなければ、イソップ伝でもないが、当時のイソップ理解の程度をさぐる参考になるので、あわせて次節に収載しておく。盤峰樵者が如何なる人物かは不明である。関場同様に「以蘇菩」という表記を用いている点から推すと、関場自身かもしれない。

### 『花の園生』

臨済宗妙心寺派の信徒団体、仏教花園婦人会の月刊機関誌。明治二四年二月創刊。初代会長は伏見宮文秀女王。当初は東京で発行されたが、ここに引用する第三四・三五号当時は京都府内の花の園生社発行。この二つの号それぞれにイソップ寓話が二話ずつ載っている。

第三四号 (明治二六年一月)

「伊蘇普物語 晩翠禪史訳」(目次では訳者は「桜外生」とある)

- 1 「土鼠と野牛の話」(A 353)
- 2 「盗賊と雄鶏の話」(A 122)

第三五号 (明治二六年二月)

「伊蘇普物語 桜外生訳述」

- 3 「鷹と鶯の話」(A 4)
- 4 「鳩と鳥の話」(A 202)

第三四号の訳者が本文では「晩翠禪史」とある。土井晩翠(一八七一一一九五二)は年譜によると、旧制第二高等中学校生であった明治二六年七月から「晩翠」の号を用いているようであるが、これと「晩翠禪史」との関係は不明である。また目次では「桜外生」とあり、これと「晩翠禪史」が同一人物なのか、どちらかに誤記があるのかも明らかにできない。

いずれも文語体で記されるが、4の会話は口語体。

### 『少文林』

大阪の文林会発行。「発行兼編輯人」は中村丈太郎。歴史上の逸話の他、地理・数学・理科なども含む学習雑誌。創刊は明治二五年二月か。月一回または二回発行。一つだけイソップに基づく話が載る。

第二巻第五号 (明治二七年三月三日)

「◎蛙の演説 久津見藤村」(*Aesopica* にはない。

James 本の 172 The Boys and the Frogs と同話) (絵)

久津見については一切不明である。

### 『少年新誌』

東京の少年新誌社から発行された月刊少年雑誌。明治三〇年七月創刊。第一号の編輯人は井出光治だが、ここに引用する第二・三号は長田致孝、第四号は長田致行。

「人物養成を以て中心とし登載の事項凡て此一点に統合す」「高等一年より中学二年迄の程度を標準として専ら学校の課程訓練と一致連絡せんことを期す」と謳いあげ、精神修養と科学学習の資となることをめざす。賛助員には、時の文部大臣蜂巣賀茂韶、学習院長近衛篤磨など教育界の権力者、権威者が並ぶ。

以下のとおり、イソップ寓話を掲載する。

第二号（明治三〇年七月）

1 「伊蘇普物語註解 同人（S.F.）」（A 155）

第三号（明治三〇年九月一三日）

2 「イソップ物語（意訳及註釈）」（A 133）

第四号（明治三〇年十一月五日）

3 「イソップ物語註釈及意訳」（A 10）（絵）

4 「貪欲太郎と嫉妬之助の話」（A 580）（絵）

1・2・3は英語学習の記事である。英文はいずれも当時英語教科書として使用されていた *Stickney's Fables* から採っている。「意訳」は通常の和訳、翻訳をいう。「直訳」に対しての語であろう。直訳とは当時外国語教育で採用された方法で、日本語として不自然になることも厭わずに、極端なまでに逐語訳を徹底することを用いる。「註釈」部分は、本稿の目的とは無関係なので、次節の「本文」では省略した。

4は登場人物、舞台を日本に置き換えた翻案。

いずれも文語体だが、1・2・3の会話は口語体。  
『羽陽之少年』

山形市の羽陽少年社から発行された明治三五年七月創刊の月刊少年雑誌。発行兼編輯人は吉田左膳。吉田は『山形教育雑誌』の編輯人でもあり、山形の教育行政に携わっていた人物と思われる。第六号にイソップ由来の話が掲載されている。各地でこういった地方雑誌が発行されたことと思われるが、現在では探索が困難である。その意味ではこの例は貴重である。作者「霞山子」については全く不明。

第六号（明治三五年二月二五日）

「かうもりの二心 霞山子」（A 566）

『少女智識面報』

東京の近事画報社から出された明治三八年九月創刊の月刊雑誌。画によって「少女の智恵を増し智識を啓く」（緒言）ことを謳う。編輯は石丸敏一。美術書の著作がある石丸の編輯だけに、他の少年少女向け雑誌とは異なり、挿絵は水彩画で、カラーで印刷されている。各話見開き二ページに収める。一ページが文、一ページが絵。文が先の場合も、その逆もある。これは、文と絵とで印刷方法が異なるため、文だけの紙、絵だけの紙と分けて印刷されているからである。調べた範囲では、これに三話イソップ寓話が載る。

第一号（明治三八年九月一日）

1 「狐と鶴のお伽話（イソップの二話）」（A 426）（絵）

絵は尾竹竹坡（一八七八〜一九三六）によると思



われる。

第二号 (明治三十八年一〇月一日)

2 「●黄金の鶏卵」(A 87)(絵)

第三号 (明治三十八年十一月一日)

3 「●驚と鳥の智。」(A 490)(絵)

絵は尾竹竹坡。

『少年智識画報』

『少女智識画報』と同時に同じ近事画報社から創刊された月刊雑誌。『少女智識画報』同様に、画によって「少年の智恵を増し智識を啓く」(「緒言」)ことを謳う。編輯はこれも石丸敏一。やはり、収載される絵は他の少年雑誌とは一線を画すことができる。各話見開き二ページに収まり、文と絵が一ページずつであるなど、体裁は『少女智識画報』と全く同じ。これに六話、イソップ寓話が載る。

第三号 (明治三十八年十一月一日)

1 「(十二) 鷺と矢(お伽話)」(A 276)(絵)

第四号 (明治三十八年十二月一日)

2 「(二) 狼と鶴」(A 156)(絵)

3 「(四) 太陽と北風」(A 46)(絵)

第六号 (明治三十八年十二月)

第六号は明治三十九年二月発行のはずだが、奥付けにはこうある。

4 「(三) 樵夫と河伯」(A 173)(絵)

第八号 (明治三十九年四月)

5 「(三) 獅子の婿入」(A 140)(絵)

6 「(四) 兎と亀」(A 226)(絵)

『英語之日本』

東京の建文社から発行された月刊の中学生向け英語学習雑誌。明治四一年八月創刊。主幹は佐川春水(正則英語学校講師。一八七八〜一九六八)・秋元俊吉(ジャパニタイムス記者。一八八四〜?)。明治四二年から四年にかけて、イソップ寓話の英文、その和訳、註釈が連載されている。以下のとおり。

第二卷第一号 (明治四二年一月一日)

「◎イソップ物語詳解 在外國語学校 長谷川元吉」

1 The Wolf and the Lamb. (A 155)

第二卷第二号 (明治四二年二月一日)

「◎イソップ物語詳解 在外國語学校 長谷川元吉」

1 The Wolf and the Lamb. (A 155)

2 II. The Fox and the Lion. (A 10)

第二卷第三号 (明治四二年三月一日)

「◎イソップ物語(訳註) 在外國語学校 長谷川元吉」

3 III. The Dog and His Shadow. (A 133)

第二卷第四号 (明治四二年四月一日)

「◎イソップ物語詳解 長谷川元吉」

4 IV. The Lark and Her Young ones. (A 325)

第二卷第五号 (明治四二年五月一日)

「◎イソップ物語詳解 東京外國語学校 長谷川元吉」

4 IV. The Lark and Her Young ones. (A 325)

第二卷第六号 (明治四二年六月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 東京外国語学校 長谷川元吉」

5 V.—The Drum and the Vase of Sweet Herbs.  
(*Aesopica* にはない。James 本 Townsend 本にもない)

6 VI.—The Wolf and the Goat. (A 157)

7 VII.—The Two Frogs. (A 69)

第二巻第七号 (明治四二年七月一日)

「◎イーンソップ物語《訳註》 東京外国語学校 長谷川元吉」

7 VII.—The Two Frogs. (A 69)

第二巻第八号 (明治四二年八月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 東京外国語学校 長谷川元吉」

8 VIII.—The Lion and the Mouse. (A 150)

第二巻第九号 (明治四二年九月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 東京外国語学校 長谷川元吉」

8 VIII.—The Lion and the Mouse. (A 150)

9 IX.—The Mouse, the Cat, and the Cock. (A 716)

第二巻第一〇号 (明治四二年一〇月一日)

「◎いそつぷ物語詳解 長谷川元吉」

10 X.—The Fox and the Grapes. (A 15)

11 XI.—The Crab and Its Mother. (A 322)

第二巻第一一号 (明治四二年一一月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 長谷川元吉」

11 XI.—The Crab and Its Mother. (A 322)

12 XII.—The Wolf and the Crane. (A 156)

13 XIII.—The Axe and the Trees (*Aesopica* にはない。James 本の 59 The Trees and the Axe と同話)

14 XIV.—The Ants and the Grasshoppers. (A 112・373)

第二巻第一二三号 (明治四二年一一月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 長谷川元吉」

14 XIV.—The Ants and the Grasshoppers. (A 112・373)

15 XV.—The Frogs Who Asked for a King. (A 44)

第三巻第七号 (明治四三年六月一日)

「◎イーンソップ物語詳解 長谷川元吉」

15 XV.—The Frogs Who Asked for a King. (A 44)

16 XVI.—The Ass in the Lion's Skin. (A 188)

17 XVII.—The Mice in Council. (A 613)

横書き二段組みで、英文と和訳が対照できるように左右に並べられ、下に註釈を付ける。各回見開き二ページ。英文は『少年新誌』同様に Stickney の *Aesop's Fables* から採っている。Stickney 本の第一話から第一七話までを、掲載順もそのままに載せる。和訳は敬体の口語文。註釈は「詳解」とあるとおり詳細であるが、連載が進むにつれて量を減らしている。「註釈」部分は、本稿の目的とは無関係なので、次節の「本文」では、必要な場合を除き省略する。

1・4・7・8・11・14・15 のように、二つの号に涉って掲載される場合がある。17 は途中で終わっているが、以後の号にも続きは見当たらない。15 の続きが半年

後にやつと掲載されていることと考え合わせると、長谷川に何か事情があつたかと想像される。

なお、明治四二年一二月発行号が第一三号となつてゐるのは、同年一月一五日に「定期増刊秋の巻」が第一号として刊行されているからである。同様に翌四三年三月一五日に「定期増刊春の巻」が刊行されているので、同年六月発行号は第七号となつてゐる。

訳者長谷川元吉については調べがついていない。

### 三 本文

前節に取り上げた雑誌掲載話の本文を以下に示す。引用に当たつては、以下の方針に従う。

○ 原則として原文どおりとする。

○ 漢字・仮名は原則として現行の字体とする。異体字は最も一般的な字体に改める。

○ 注意すべき箇所には＊を付し、末尾に注記を加える。

○ 『少年新誌』『英語之日本』の注記における Stickney の *Aesop's Fables* は明治三五年刊の岡崎屋版に拠る。

○ 『英語之日本』は原本に倣い、横書き左開きとする。

### 『教育小供のはな誌』

第三号（明治二〇年九月三日）

#### ● 御殿の鶯と數鶯の話

むかし或る大名の御殿に、鶯が飼てありました、てふど春の中頃の事で、お庭の梅の花も見事に開き、四方には小鳥の声も麗らかにきこえて、御手飼の鶯と、さへずりあふて居りまし

た、然るに一羽の鶯は、忽ち籠の鶯の傍へ来り、話を致すには、さてもお前は仕合のよき事だ、この様な美しき籠に養われ、朝晩申分なき、すり餌の御馳走に腹を満し、貴きお姫さまに愛せらるゝは、誠に浦山しい事だ、僕も声がよかつたならば、君の様なよき仕合で、あるだろうと申しますと、籠の鶯の申すには、なるほど君の言葉も、尤もだが、なかなか楽しい事は少しもない、僕などは、いかさま美しき籠に住み、おいしい餌は沢山だが、朝から晩まで、此の籠の外へは出られず、少し休まふと思ふと、此鶯はさへずらない、など、小言を云われ、其究屈なことは、例へようもない程だ、反て君の自由こそ、羨やましい事であると、申したそうです、世に富たる人や、貴き人は、何も不足はないようなれど、心の苦勞は、なか／＼多いことでもあります、されば何人も、適當の満足と云ふことが、大切であります（挿絵）

第四号（明治二〇年九月一日）

#### ● 無分別なる亀の話

海辺の沢に、年久しく住める亀あり、二羽の鶴も、とき／＼愛に來り、遊びけるゆへ、亀とは大に懇意になれり、或時亀は、鶴に向ひて云ひけるに、君達は翼あるが故に、高く空中を飛び行き、広き都も一目に見下し、面白きことでありましよう、友だちの好みに、何卒僕を伴ひて、一度び空中の遊を、なさしめ玉へと云ふに、二羽の鶴は口をそろへ、それは不良見なり、我々は羽あるを以て、飛ぶことは自在なれども、君の如く、久しく水中に在りて、水底の名所を見物すること能は

ず、これは各自の性質なれば、致し方なし、思ひ留り玉へといへど亀はなか／＼承知をせねば、鶴も甚だ迷惑ながら、然らば伴れて参らんとて、一本の棒を、亀にくわへさせ、いかようの事あるも決して口を開く可らずとて、堅く警めおき、二羽の鶴は、棒の両端を喰へ、空中高く舞ひ登れり、程なく町の入口に至るに、多勢の小供が遊び居り、此在様を見ていろ／＼悪口を云ひて、亀を罵りければ、亀は、くやしき堪へ難く、腹立ちまぎれに、鶴のいましめを忘れ、小供等を云ひまかさんとて、思はず口を開きけるに、身は忽ち棒を離れ、大地に落ちてこな／＼に、甲も碎けて死たりとぞ、誰人も為すまじき事を、無理になさば、この亀の如く、直ちに生命を失ふにいたる、慎むべきことにてこそ

(挿絵)

●尾なし狐 在横浜 富士見の里人談

飯令尾を残すとも頭丈は助かりしよと喜ひてある掛置を抜け出せし狐あり、鹿さりながら森の中を漫歩する時は他の狐の己が尾なきを見て、窃かに笑ふ者多く、己も何にとなく我姿の哀れ気なるに、太たくはぢらひてかの掛置にて死せしならばと思ひしが、狡猾は狐の持前はからず計を案じ出し或日己が仲間をさる森に集めて己が云ひ出す言葉に従ふべき条約を結びけり

狐「諸君は私が今尽力致します此狐社会の自由と安楽とに付いて一向に考がなと思ひます私も自分が自身此事を実際に試みて来なければ私も実は信用は致しませんで有りま升併し只今人間社会で考へて見たなら必ず

狐はあの様な長い尾を担いで歩くが何丈の機能があるか誠に無益な邪魔者を狐はよく辛抱して居ると思ふに違は有ません夫故に私は皆さんに忠告致し升皆さんが私の論に従がつて利益を得今日より断然其無用な尾をきつて開化風の狐となり玉わん事を私は尤も喜ひ升其時一匹の年老し狐が前の方に進み出で

「私は只今汝自身の姿に大層な変化がありまして元の姿となり玉は必ず我々の尾を切れとは申されますまい此の言葉の終らぬ中にかの尾なし狐はコハ叶はじと尻尾を捲(デハナイ)狐鼠々々として逃げ去れり

里人云ふこはフエイルブス(マコトて西洋の作話にて我國の桃太郎の如き者なれどかの国の教育の文の中に見えたれば少かお小供衆の為に訳し出しぬ只今の世の中は言論自由とか申し皆々御勝手な言を喋舌玉ふ故に童幼諸君は親教師の外に無闇と人の云ふ事を信じ玉ふな

\* 傍線は原文では左傍にある。

第五号(明治二〇年九月一七日)

●蟻といふ話

時しも冬の始めとなり、稲はこと／＼刈りとりければ、いなどもは、今迄自由に喰ひ居し、食物を失ひ、見苦く餓死せしが、一足のいなごも、大に饑多つかれ、心の中に思ふよふ蟻の家には、貯も多ければ、彼を頼みて、身を寄せんとて、しよ／＼と蟻の住家にいたり、ひたすら頼みけるに、蟻の答へて云ふよふは、われ／＼は、暑き夏の日もいとわず、働きしゆへ、かく貯へも、多けれど、君などは、朝夕甘き露を飲み、



おいしいき稲に、腹を満し、働きもせずして、飲食せしゆへ、見  
苦しくも、今日の饑に、臨みしなり、そのよふなる、不精ものは、決して養ふ能はずとて、穴の外へ逐出しなければ、いなごは、  
忽ち餓死して、反つて蟻の餌じきと、なりしとぞ

(挿絵)

## 第六号 (明治二〇年九月二四日)

○蜻蛉と蟻の話 紀伊 山本 投

虫の数のおびたしきは皆さん御存知でありますがこの中にも  
賢き虫もあり愚かなる虫もあります蟻と云ふ虫は体こそ少  
さけれ誠に賢き虫であります凡ての虫は冬はみな土の中  
にて生活を遂げる者でありますゆへ彼の蟻は炎天の夏の暑さ  
も苦とせずして朝の未明より夕暮まではたらきて食物をお  
のれの住家に運び貯へ何時冬が参るふがさしつかへのなきよふ  
に致して置ますこれに引かへ蜻蛉と云ふ虫は愚か者であります  
すゆへ其日／＼饑たときには有会ふ食物に腹を満たし一向  
食物の用意を致さぬゆへ冬に至ると忽ち饑へこへて死にます  
人間でも斯の通りにて若しも蜻蛉の如く貯と云ふことを  
せぬならば不幸にして病気に罹るとき医師の薬も受ることが  
できぬばかりでなく忽ち食物に事をかきまて終には活るべき命  
をも失ふよふになります私の考へには造化が此世に蟻をおこ  
しらへなされたのは決して徒らごとではありますまい怠惰た  
る人を警めて斯の如くはたらけとの事であらうと思ひますさ  
れば皆さまも正しく勉強して蟻に恥ぢない様に御注意が肝  
腎々々

## 『小国民』

第一号 (明治二二年七月一〇日)

鼠の国会

嘗て、鼠の社会に国会を開き、猫の害を防ぎて更に鼠権  
を伸べ、跋扈跳梁の勢を張らんと議を決せんとせり。  
多くの鼠、諸国の市郡より代議士となりて出で来り、米庫  
を以て国会の議事堂とし、一同相会し、甲論じ乙駁し、数  
日の間討論したれども、多数の賛成を得るほどの名論も出で  
ず、皆殆ど困じ果てしが、一匹の年少き鼠ありて、末席より  
起立し、手をあげて「議長」と呼び、発言の許しを請へり。  
議長は之に発言を許せしが、やがて此の少壯の鼠は、意氣  
揚々と説き出して曰く「拙者開会以来老鼠諸賢の論議を  
聴くに、皆陳腐の御論のみにて、一ツも取るべきものなし、是れ  
鼠社会の一大恥辱ならずや。故に拙者は、若輩なりといへ  
ども、敢て一議を提出し、以て諸君の賛成如何を試みんと  
す。抑も彼の猫輩の吾が社会に危険なるは、敢て彼奴の身  
体動作を以て比ぶれば、寧ろ我々こそ却て猫より勝るなれ。  
故に、彼れ我れを逐ふも、我れ巧に穴に逃げ込むこと難きに  
あらず、唯恐るべきは彼奴の足なり。彼奴の足は鋭き爪を有  
し、其の蹠の柔かなるごとく真綿細工の如し、是を以て、歩む  
も曾て音を生ぜず。故に、我々夜会を開き踏舞を催し相楽  
しむに当り、近く背後に敵の忍び来ることもあるも、之を知るに  
由なし。其捕ふる所となるも亦宜ならずや。拙者此に於て  
考ふるに、若し猫をして其頸環に鈴を附せしめば、彼れ歩む  
に必ず鏗然の声を発すべし。斯くすれば、如何に真綿に均し  
き足なるも、其近くときは忽ち其音を知るを得て、我々鼠



社会は無事太平なること疑ひなし、諸君もて如何とするや」と、其言葉猶終らざるに、此の議論は、全会殆ど一致の勢にて拍手喝采し、賛成を表し至極の妙案妙計なりと賞賛せり。

然るに、議員の中に一際目立し老鼠あり、席を起ち、「今少壮なる某君の提出せられし議案一応承はれば異議すべき点なき様なれども、一体誰が猫に鈴を懸けて呉れますか、其辺の事承はりたし」と、冷笑しつつ質問せしかば、他の鼠も亦心付き、「成程、是は実行し難き議論なり、猫に鈴を懸けるは別に委員を撰むに及ばず、彼の発議者自身に往きて猫に鈴を懸け来れと、口々に攻撃せしかば、彼の鼠赤面して一言の答辨もなく、スゴ」と議事堂を退きたりと。

此の鼠は猶未だ猫の何たるを知らざるものなり、経験も更に無きものなり、妄に烟水練の議論を持出し、他の笑ひを招ぎしも理なり。而して此の国会は遂に決議に至らざりしゆゑ、今猶何国にも鼠の取締をなし其跋扈を防ぐは猫なること、読者諸子も知る所なり。

(挿絵)

## 『いども』

### 第二巻第一号 (明治二十三年二月二十八日)

むぐらの児。

むぐらの児父に向ひて「と、さん、私は何でも見分けが付きます」と云ふゆゑ、其の父試みに乳香(形は石に似て香りある物)の塊りを出して、「これは何じや」と問へり。児の曰はく「石でございます。」父笑らひながら、「オヤ、おまは見る

事の出来ぬばかりじやない、嗅ぐ事も出来ない子。一つの不手際なことを自慢すると、其がために他の不手際なことまで頭はれます。

(挿絵)

### 第二巻第二号 (明治二十三年三月三十一日)

蝶と蟻。

蟻は毎日働ひて色々な食物を貯へ、春の陽気なる日にも少しも怠りません。蝶は之を見て大変笑止げに申しますには、『君は実に馬鹿げた者である、此春の日の花笑ひ鳥歌ふ陽気な時に、見悪き風をして働ひてばかり居るのは、実につまらないものである、我などは奇麗な衣裳を着て此処彼処の花園などを飛び歩ひて、実に愉快の事だよ』と威張まわりて居りましたが、やがて春過ぎ夏去りて間もなく雪降る冬の日となりましたが、蟻は穴の中に入りて何不自由なく生活して居りましたけれど、蝶は食物の貯へなくて遂に飢え死んでしまひました。夫れだから人も同じことです、若ひときに働ひて置かねば、蝶の飢死の様に仕方のないよふになります。

### 第二巻第四号 (明治二十三年五月三十一日)

汝に出づるものは汝にかへる。

狐は獣の中にて随分狡猾な奴でありまして、時々虎の如き猛獸を後ろに従へ、所謂虎の威を借りて揚々と自得する如き獣ですが、或る時鶴を饗応せんとて招きましたが、其実は鶴を困らせんために呼んだのですから酒を大皿に入れて出しましたゆゑ、成程鶴は困りました。狐等は舌を皿に入

れ嘗めまされど、鶴は長き嘴にてコツ／＼とやつて見ても中々飲めませんから、満坐の中に笑を受け、赤面ながら帰りましたが、鶴は口惜しくてたまりません、何時かな返報してくれんと思ふて居りますうち、不図一羽の鶏を得ましたから、之を以て狐を呼ばんとて、使を遣はし申しますには、今日は幸ひ鶏を獲ましたから、一盃を進せんと思ふすれば、お出の程を願ひますとて招きましたが、其実は矢張り辱を雪がためでした。狐は何の気もなく喜びながら来ましたが、酒や鶏肉を首の長き徳利の中に入れて差出しましたから、酒気芬々鼻を撲つても、どふも飲むことは出来ません、況して今日は性来の好物たる鶏肉の下物なれども、是れとて香ひばかりにて、鼻をむかつかせて居ました。鶴は微笑みつつ、嘴を徳利の途中に突き入れて、左も甘まさに飯／＼んだり食つたり為ますのを、狐は仕方なく、只眺めて居るばかりにて、非常の恥辱を受けて、狐鼠／＼と逃げ帰つたと云ふことですが、世間は皆此の如きものにて、我人をそれば／＼我人を譏る恰かも天に向つて唾吐く様なものです。

(挿絵)

第八号 (明治二十三年九月三〇日)

獅子と黒奴

獅子は獸王と申し、百獸の中何よりも力の強い怖ろしい動物であります。黒奴と云ふのは、皆さん御ぞんじであります。アフリカ又は南アメリカ杯に居る色の黒い野蛮人で、むかし西洋人は、牛か馬の様に之を売買して農業又は其他様々の事に使つたものであります。

此の獅子と黒奴に就いて一つの話が御ざります。或人が余り非道に黒奴を使ふたものですから、其の黒奴は苦しさ堪へずして逃げました。逃げて山の中に這入りました所が一定の獅子に出会しました。其の恐ろしさ！身の毛も竦立つ様に覺えました。

黒奴は、逆も逃れぬ所と覺悟して、身を震はしながら道の傍らに縮まつて居りました。然るに獅子は其の黒奴に掛りませんで、そろ／＼と歩み寄つて、優しい顔をして、前の左の足をあげて、黒奴の前に出しました。黒奴は不思議に思ひまして、其の足を見れば、足うらに大きな刺がさ／＼りてあります。これは多分踏めきをしたのであります。

やがて黒奴は其の刺を抜いて、水で洗つて遣ましたら直に直りました。是より獅子は黒奴のために親切な友達になりました。黒奴は獅子と共に住ひまして、凡そ五六ヶ月暮しました。其の間獅子は、色々な食物を持来りて黒奴に与へました。

其后黒奴は終に其の主人に捕はれました。「此奴は主人の恩を忘れて、出奔したる大罪人だから、獅子に喰はして殺して仕まへ」と言ひまして獅子の圈の中に投込しました。其獅子は、五六日前から食物を与へんで、腹をへらさして置いたのであります。此の無惨なる死刑を見物しようと思つて、近所の人々は圈の周囲へ黒山の様に集まりました。誠に憫れな話でござります。

然るに其の獅子は黒奴を食ひません——不思議です——却て嬉しそうな顔をして、黒奴の傍へ参りました。よく／＼見れば山に居た時中よく暮して居た友達であります。そこで

黒奴は、なれ／＼しく獅子と遊びまして其の背に跨つて、威張つて見せました。

主人を始め見物人は、一同此の有様に驚きあきれて、其の訳を尋ねました。依て黒奴は委しく其の次第を話しましたれば、主人も之に感じて終に黒奴を縦しました。

(挿絵)

第九号 (明治二十二年一月一九日)

樵夫と山の神。

ある樵夫が山へ木を伐りに行き誤ちて溪川へ斧を墜しました。商ばい道具を亡くすると其日から妻子を養ふ事が出来ませぬゆゑ、どうしたれば佳いかと歎き悲んで途方にくれてゐました。

其処へ不思議に山の神さまが出で来たりて「何を其やうに悲んでゐるか」と問はれますから、斧を墜した事を話すと、山の神は其まゝ川の中へ入って金の斧を拾ひ上げて「其方の墜したのは是か」といひます「其やうな立派のではござりませぬ」といふと、又銀の斧を拾ひ上げて「是か」「それでもござりませぬ」と今度はほんとうに樵夫の墜した斧を拾ひ上げて呉れました。樵夫は涙を流して礼をいふと、山の神は其正直を褒めて、金の斧も銀の斧も残らず樵夫に呉れました。

樵夫は家へ歸りて此事を仲間の者へ話しましたれば、皆非常に羨しがりました。其中一人の欲深い樵夫がソツと其山へ行き木を伐るふりをしてわざと斧を溪川へ墜し悲しさうにそら泣をしてゐました。

案の如く山の神が出で来りて斧を墜したときいて、川の中へ

入って彼の金の斧を拾ひ上げて「これか」と尋ねました。欲深い樵夫は立派な金の斧を見てほしくてたまらず「ア其こそ私の墜した斧でござります」と虚言を言ひますと、山の神は「其方は虚言をつく不届者かな」といひて、其儘何処へか行つてしまひました。欲深い樵夫は金の斧を貰はない計りでなく自分の斧迄も墜し損となり、今度はほんとうに悲みながらスゴ／＼家へ歸りました。

(挿絵)

猫と猿。

同じ家に畜はれてゐる猫と猿とがりましたが、二足ながら中々わるいやつでありました。或日つれたちて何か佳いものがないかと其処等を探しまわるうち、火鉢の灰の中に栗が入れてあるのが眼につきました「猿吉さん佳いものがあるぜ。是でまづけふの昼めしに有つた」と猫が言ふと、猿が「お玉さんそれを引出すのにはわたしの手よりかお前の手の方が都合がよいからどうか頼むぜ。みんなとり出して半分わけにしよう」

玉はやけどしながら「ツ／＼引出して」さあ是からが半分わけだ」と此方を見て見ると、何時の間にか猿めがみんな食べしまひ、頬を脹らして頻りにムガ／＼させてゐました。併し盗み物だから玉も大きな声をして怒る事が出来ませんであつた。じぶんにも悪いことをして弱点があればとかく人にばかりにせられます。

(挿絵)

第一〇号 (明治二十二年二月一九日)



鼠の会議。

天井の片隅に凡そ二十匹ばかりの鼠集りて何か相談を始めました。其中首頭と見える一匹の白鼠が立上りて「みなさん呼び寄せたのは、外の事でない。我々は此通り眷族も沢山あり、毎日旨い物を食べては楽しく遊び、何一つ不自由はないが、只心配なのは、この飼猫のあの手助。彼奴折々やつて来て、我々仲間を苦め、わたしの孫のお忠も可愛やきのふと喰はれて仕まつた。どうかして敵玉助めを、首尾よく退治する工夫はあるまひか。皆さん良い謀を聞いて下さい」と申しました。

何れも顔を見合せるばかりで、チューとも答ふる者がありませぬ。其中に忠八といふ肥太ツた一匹の黒鼠が大声を上げて「諸君所詮あの玉助めを殺すの退治するのといふことは出来ぬ話だ。夫より彼奴が何時来るといふことさへ分れば逃るがよい、遁げるは何より容易い事ではないか。僕に良い工夫があるから聴き玉へ。彼奴の頸へ一ツの鈴を縛りつけて置くのだ。すると彼奴の歩くたびに鈴がチリン／＼と鳴る、我々は其音を聞きつけると、直に穴へ隠れれば宜い。何と是より良い謀はあるまい」と聳喰ひ反してさも自慢さうに演説を為しました。皆々手を拍つて感心し、最早心配する事はないと、勇み喜んでると、一匹の鼠がフト不審を起しました「併し其鈴をどうして縛りつける事が出来るか」忠八鼠此間に答へる事が出来ず「サアそれは」と言つたばかり、どうか自慢の謀が無くなりました。口に立派に言はるゝ事も実際に行ふことが出来ずば、益にたちませぬ。其事は少しの価値もありませぬ。

(挿絵)

第一号(明治二四年一月一九日)

蛙と鼠。

意地の悪い大蛙が、ある時鼠と連立ちて旅をしました。大蛙はポイ／＼と跳べば鼠はチヨ／＼と走る、溝を跳びこえ叢を通りぬけて、段々と歩いて行くうち、一つの池の隄出ました。鼠は遊ぶことが出来ませぬ故「隄を回らうではないか」といひましたが、大蛙は中々承知しませぬ「隄を行つては余程な廻りになるから、矢張り池の中を行かう、其代りにはおまへを背負つてあげやう」といひました。鼠はどうも不安心に思ひ「若し墜落たらば大変」といふを「此処にある藁条で互の足を繋ぎ合せて置けば大丈夫だ」といひてとう／＼遊びで渡る事となりました。

池の中程まで渡つた時分、意地の悪い大蛙が、不意に水の中へ沈みました、鼠は驚いて手を放し、漸くに水の上へ浮きは浮いたが、自分の足と大蛙の足とが繋ぎ合せてありますから、大蛙が底の方で藁条を曳くたびに、鼠は頭の先迄水の中へ浸り、口からも鼻からも水がはいり、息をする事も出来ず、頻りに苦しみもだえて居りますと、大蛙はそれを面白い事と思つてあます面の、にくい蛙め。

折しも池の上を通りかゝつて鶯が鼠を見つけ、よき餌食に有つたと一目散に舞ひ下りて、一攫みに鼠をさらつて、虚空遙に飛び去りました。大蛙はどうなりしましたらうか、画を御覧なされば分ります。何と諸君悪い事は出来ませぬ。

(挿絵)

# 犬と影。

ある犬何処にてか一片の牛肉を盗み取りて来り、大悦びにて川の辺迄咬へてゆき、ゆつくり食はんとせし折から、不図水の中に我と同じく、牛肉を咬へたる犬の居るを見たりき。それはおのれの影ながら獣類の悲しさには「うゝそれを己の影とは知らず、牛肉を奪はんと躍りかゝりしに、いかでか取ることを得べき、影は忽ち波に消え、剩へ、我口に咬へたりし眞の牛肉迄も、水中へ墜して失ひしとぞ。あまり欲ばれば、誰にても斯のやうなる、馬鹿氣たる失策をするものなり。

## (挿絵)

### 第一二号 (明治二四年二月一九日)

#### 狼の失望。

一匹の狼何か餌食にありつかふと思ひ、或家の前へ来りしに内にて小児の泣く声聞え。乳母と覚しき声にて『さふ泣くと狼に喰はせますよ』といふ。狼それと聞いて『これは有難い』と窓の下に坐りて待ちてをりしに、やがて小児の泣声も静りたり。其うち再び乳母の声にて『ア坊ちゃんはい御子だ、狼が来たら打ツてやりませうね』。狼は案に相違し『打たれてたまるものか』と早々逃げ去りぬ。当にならぬ事を当にすると誰れも此狼の如き目にあふべし。

## (挿絵)

#### 蚤と虱の競走。

蚤と虱と腰のまわりに住んでゐましたが、或時二匹して脊筋街道を通りぬけ、白髮山の麓の身柱村の入口迄競走をし

やうと言ひ出しました。蚤は元より跳ぶのが自慢でありますから『オイ虱君、君はまあ精出して走りたまへ、僕は血に酔ふて此通り真赤だから一眠入して跡から直に追付て見せやう。ナ

ア二僕がビヨイ〜と三度ばかり跳ぶと、君等の一日走ツたぐらゐる捗どるから』と、大きな言をいひて其儘軼をかきて寝てしまひました。暫くして眼を醒まして見ると虱の影も見えませぬゆゑ『さあ大変、遅くなツた』と自慢のビヨイ〜を三度も四度もやツて見ましたが、もう追付きませぬ、虱は疾く身柱村の入口に待つて居て『蚤さんお早う』。

如何程智慧學問があるとも、自慢をしたり急げたりすれば何の益にも立ちませぬ。飯令少しばかり智慧が鈍くとも、急げずに精を出すもの、方が遙に優れたる人になります、此道理は只今の話にて能く分りませう。

### 第一三号 (明治二四年二月一九日?)

#### 蝙蝠の心変り。

或時鳥と獸との間に大合戦がありました。然るに蝙蝠は羽があるゆゑ鳥方の味方となつて軍をしましたが、敵方に獅子、虎、猪などの豪傑が夥しくゐるので、此戦は多分鳥方の負けならんと思ひ、劇に心変りして獸方の味方となりました。

然るに間もなく敵味方和睦調ひて軍を止むる事となり、互に打集りて酒宴を開きました。其時鳥方より蝙蝠の心変りを獸方へ知らせました故、獸方にも其やうな心に忠信のないは、味方に在つても害になるばかりと、一同相談の上遂に蝙蝠を仲間から逐出しました。其故に蝙蝠はどちら方



もの者とも顔を見合す事が出来ず、人家の壁のあはいに隠れ栖み、夕方になりて顔のよく見えぬ時分に漸く外に出で、食物を探し回るやうな便りない身の上となりましたとさ。人間でも其如く心に忠信のない者は、遂には友達にも見限られ一生わびしく暮すやうな身となります御用心――。

### 尾無し狐。

一匹の狐、自分の尾の立派なる事をいつも自慢し居りしが、或時狐奔にかゝりて其尾をブツリと缺み取られたり、狐悲しき譬ふるに物なく仲間の者より尾なし狐よとて笑ひ譏らるにつけても、最早此世に生甲斐なしと迄にふさぎをりしが元々善からぬ生れつきの者なれば、如何にもして他の狐等にも尾を断らせんと、狡猾なる目論見をなしぬ。

或日仲間の狐等を招きて次の如く説きすゝめたり「諸君。諸君の後の方についてある其尾といふは全体何の役に立ちますか、見にくい、づら／＼して用のない、邪魔物ではありませぬか、そんな物を附けて置くといふは実に訳の分らぬ話です。諸君はまだ尾を亡くすれば、どれほど便利で、心持がよいか御存知ではあるまい。論より証、扱僕は尾を缺み断つてから、生れ替つたほど身軽に活潑になつた。諸君僕は決して悪い事は言はぬから、諸君も僕のやふに尾を缺み断つておしまひなさい。

他の狐等は何れも尾なし狐にたまさるゝ程の馬鹿狐にてあらねば「僕達も狐奔にかゝつて尾を缺まれる時があらば、其時にこそ君の説に賛成させよう。先づ夫迄は大切につけて置きます」など、冷かして誰も取あふものは無かりき。他人の言ふ事にうかと乗れば、飛んだ目に逢ふ事あり用心すべし。

### 『小学生徒之友』

第九号（明治二三年二月五日）

○熊ト旅人（前号ノつゞき）

さて熊ハ藪ノ中カラ出デテ来、テクうくうくとノ側ヘ進ミマシテ頭カラ足ノさきマデ嗅ギ廻リマシタ此時此人ノ心持ハどんナデアリマシタラウ別、テ熊ガ頸ノまわりヲ嗅ギマシテ生暖カナ息ガ顔ヘ当リマシタリ鼻ハナノ端ノ毛ガ耳ヘ触フレマシタリスルトキハ命ガアツテモ自分ノ命デナク体ガアツテモ自分ノ体デ無イヤウナ心デアリマシタラウそれカラ熊ハ幾度モ嗅マシタガ死人ト考ガヘマシタカ再ビ藪ノ中ヘはひり見ヘナクナリマシタ

ばかりとハ木カラおりテまゐリマシテ自分ノ卑怯ナ行ヲすこし面目ナク思ヒマシタノカ常談デゴまかス積リデクうくうくと二向ヒ

熊ハなんダカあなたニ耳語ヤクやうデシタガ何ヲ云ヒマシタト聞キマシタそこデくうくうくとハ次ノやうニ答ヘマシタ

熊ハあなたノやうニ不人情デ臆病ナ人トハこれカラ交ハラヌガよイト申シタ

大概タイだん高慢ナコトヲ云フ人ハあぶない時ニなりマスト却ツテ臆病ヲナモノデアリマスガ人ハ口ガ達者ナヨリハ行ガたしカナ方ガ宜ウ御座イマス

第一七号（明治二三年六月五日）

○蟻トきりくすトノ話 青木幸太郎君寄贈  
夏モ過ギ秋モたチ冬ガれノ頃、二なりテ或暖カナル

日蟻どもガ多ク集マツリ夏ノ日ニ取り集メ置キマシタ餌ヲ日ニ  
千サウトシテ穴カラ引出シテ居マシタ所へイト饑ヘ勞レ  
マシタきりぐすガ這ヒつりテ命ヲ続グたメ少シ其  
餌ヲ分ケテ下サレト乞ヒ願ヒマシタ其時年老タ蟻ガ  
ふりかへリ見マシテ如何様あなたハきりぐすデスナそなた  
ハ夏中何ヲシテ暮シナサレタ又なげ其やうニ餌ニ困ルノデ  
スト問ヒマストきりぐすハほこり顔ニ答ヘマスノニハ此夏ハ  
面白ク花ト戯レタリ葉ニ眠リタリ露ヲ吸ヒテ歌フ  
「モアレバ舞フ」モアリマシタト言ヒ切キラヌニ蟻ハ笑ヒマ  
シテさう云ウ「ナレバ恵ム」ハ出来マセン我共ハ夏ノ  
炎天ニモ背ヲ暴シテ餌ヲ運ビ冬ノ用意ヲシテ置キ  
マシタ故ニ今日ノ安心ガアルノデスそれあなたハ長イ夏  
中歌ツタリ舞フタリシテむだニ月日ヲ送りナサレタカラ冬ニナ  
ルトそのやうニ饑エテ動ク「モ出来ナイやうニナルノデスト  
云ヒマシタ皆さん鑑ミベキコトデハ御座イマセンカ

○ころバナさきノまへづゑ 野島市三郎君寄贈

野猪、ガ松ノ幹ヘ牙ヲこすりつけテ磨デ居タ時狐ガ  
きマシテ声ヲかケはて御前ハ何ヲシナサル獵師モ来ズ犬モ  
吠エズなんニモ心配ハ無イデハナイカト申シマスト猪ハ振  
返カ「りさうサだが騒動ガ始マツテカラハ私ハ牙ヲ磨グヨリ他  
ニ用ガ沢山アリマスト答ヘマシタ

諸君ハこの話ニ就テ何方ヘ賛成デスカ無論猪ノはうデ  
アリマシヤウ今兵隊ガ剣ヲ拔ケト云フ喇ハガなツテカ  
ラ剣ヲ磨ギ始メテハまニ合ハナイト同ジ事デ凡テノ事ガ前ニ  
用意シテケバ後ニ仕損ハ少ナイモノデアリマス生徒諸

君も日々御通学ナサルノ二明日受クル学科ヲ其前日さ  
らいヲ致シテ置ケバ其学科時間ニナリマシテ至極愉快ニ課  
業ヲウガデキマス毎日このやうニシテ倦マズ怠ラズ勉強スレ  
バゴソ試験ノたびごとに善イ成績ヲ取ラレルノデアリマス  
決シテまへざらいヲ怠ツテハナリマセン

第二四号（明治二三年九月二〇日）

●あんどろーくるすト獅子トノ奇話

土屋大次郎君寄贈

かーせーじト云フ所ニあんどろーくるすト云フモノガアリマシ  
タガ主人ノ取扱ツカヒガ余リ酷イノデ逃出サウト決心シ  
シテ或夜ノ隙ヲ窺ヒ主人ノ家ヲ抜ケ出デ半里許  
ナル深イ森ノ中ニ隠レマシタガ彼処ニ此処ト歩ルキ廻  
リマシタノデ腹ハ飢エルシ体ハ疲レマシタカラ一ツノ  
洞穴ヲ見付テ其中ニ入り伏シ倒レテ眠リマシタするト  
何ヤラ洞ノロデ恐ロシキ獣ノ吼声ガ聞ヘマシタノ二目ヲ  
覚シこわ／＼ナガラ能ク見レバ一匹ノ大獅子ガきら／＼シ  
タル盆ノ如キ眼ヲ光ラシテ立テ居タノデあんどろーくるす  
ハ大ニ驚キ逃レントスルモ術ナク如何ハセントふるヘテ居リマ  
シタ然シ獅子ハ之ニ害ヲ加ヘル様子ハナク却ツテあはれニ  
苦痛ナル声ヲ出シテ助ケヲ求メル様デあんどろしくる  
すニ近ツキ来リマシタそうシテ獅子ハびつこヲ引ク様デスカラ  
足ヲ見マスト前足ガ腫レ上リテ実ニ痛サウデスノデあんど  
ろしくるくるすは不憫ニ思ヒ怖ロシサヲ忘レテ獅子ノ足  
ヲ取り上ゲ医者ガ病人ヲ診察スルヤウニ能ク驗メレ

# READING LESSON.

The wolf and the goat.

A hungry wolf saw a goat feeding on the top of a high cliff, where he could not reach her, so he begged her to come down, lest she should miss her footing at that dizzy height.

"And besides," said the wolf, "the grass is much sweeter here than it is up there, so you would be able to get a far better dinner."

"Thank you," said the goat, "I will come down when you are gone. I am afraid that you are thinking more about your own dinner than mine."

## 読 物

狼ト山羊

飢エタル狼アリ高キ岩ノ頂上ニテ草食セル山羊ヲ見タリ而シテ狼ハ之ニ達スル能ハザリケレバ山羊ニ向ヒ斯ル眩(マ)フベキ高地ニテハ足ヲ踏ミ外(ズ)スノ恐レモアレバ下リ来ルベシト乞ヒ又曰ク其レノミナラス此処ノ草ハ岩ノ上ノ草ヨリ美味ナレバ君ハ更ニ善キ食事ヲ為スヲ得ベシト

山羊曰ク難有シ去レド余ハ君ノ去リタル後チ下ルベシ余ハ君ガ余ノ食事ヨリ君ノ食事ヲ得ント思ヘルヲ恐ルナリ

\*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。

第四〇号 (明治二四年五月二〇日)

「英語独習」

バ大ナルとげガ刺<sup>サ</sup>ツテ居マシタカラ軟<sup>ヤ</sup>カニ其とげヲ抜キ取リテ善ク療治<sup>リヤ</sup>ヲシテ遣<sup>ヤリ</sup>マシタすると獅子ハ痛<sup>イタ</sup>ミガ減<sup>ツ</sup>ジタ様子デ大ニ悦<sup>ナレ</sup>ンデ能ク馴<sup>ナレ</sup>タ犬ノ如クニ尾ヲ揺<sup>フリ</sup>リあんどろーくるすノ手足ヲ紙<sup>ナ</sup>メタリナド致シマシタ

夫レカラあんどろーくるすハ獅子ノ客<sup>キヤ</sup>同前<sup>セン</sup>トナリテ何時デモ獅子ハ美味ナル果物<sup>クダ</sup>モノ又ハ肉類<sup>ニク</sup>ナドヲ持ツテ来テ養<sup>ヤシ</sup>ツテ呉<sup>ツ</sup>レマスカラ二三月間ハ此洞穴ニ隠<sup>カ</sup>クレテ居リマシタガ或日余リ退屈<sup>タイ</sup>シタノデ運動デモシテ見ヤウト思ヒ洞ノ外ヲ散歩<sup>ホ</sup>シテ居タノヲ計<sup>ハカ</sup>ラズ自分<sup>ジ</sup>ヲ探<sup>サガ</sup>ス兵卒ニ見付ケラレ遂ニ主人ノ所ヘ連レテ行カレマシタ

あんどろーくるすハ裁判所<sup>サイバン</sup>ニテ調<sup>シ</sup>ヲ受ケ逃亡<sup>トウ</sup>ノ罪ニテ衆人ノ前ニテ猛獸<sup>モウ</sup>ノ為メニ嚙<sup>カ</sup>ミ殺<sup>コロ</sup>サレベキヲ言渡<sup>イデ</sup>サレマシタ驍<sup>ヤガ</sup>テ其日ト成リケレバあんどろーくるすハ刑場<sup>キバ</sup>ニ引出サレ今ヤ猛獸ノ為メニ喰<sup>ク</sup>ヒ殺サレルヲカトさめバト泣<sup>ナ</sup>キ居タリ既ニシテ雷<sup>ライ</sup>ノ如キ吼声ヲ発シテ一匹ノ大獅子出デ来マシタガあんどろーくるすヲ見ルヤ飛ビ付カントハ致シマセンデ尾ヲ揺リ頭ヲ垂<sup>タ</sup>レテ恰<sup>アタ</sup>カモあんどろーくるすヲ見知テ居ル様デシタそこで役人<sup>ニヤク</sup>共ハ不思議<sup>フシ</sup>ニ思ヒあんどろーくるすニ訊<sup>ワケ</sup>ヲ尋ネマストあんどろーくるすハ此獅子ハ一度自分ガとげヲ抜<sup>ヌ</sup>イテ遣ツタ獅子デアリシヲカラ詳<sup>ツマ</sup>カニ語リテ其恩ヲ忘レナイデ此ノ様デアリマシヤウト云ヒマシタ役人共ハ此話ヲ聞キ憐<sup>アハ</sup>レニ思ヒ終ニ嘆願<sup>タノゲ</sup>ヲシテあんどろーくるすノ命<sup>チノイ</sup>ヲ救<sup>タス</sup>ケテヤリマシタト申シマス

第四五号 (明治二四年八月二〇日)

以下のような四図を載せる。絵は中山朝一。

第一図（鳥が串団子をくわえる）

第二図（串団子をくわえた鳥が松の枝にとまり、それを根元から狐が見る）

第三図（狐が串団子をくわえる）

第四図（鳥がよだれをたらしている）

以上の四図に以下の解説が載る。

### ●ぼんち画解

1鳥「今日ハ思ヒガケナク団子ヲ一串拾ツタカラ早ク彼ノ木へ行ツテ喰ウベイ」

2サア来タゾ、早く喰ウベイ、ヤア下で狐ガ喰ヒタソウニ見テイヤガラ、馬鹿狐サン喰ヒタイカアッ余リしやベツテ団子ヲ落シタ大變シダ

3狐ハ落チタ団子ヲ拾ヒテ走り行ク

4鳥ハ唾だら〜

### 「英語独習」

#### READING LESSON.

#### THE DOG IN THE MANGER

A dog once went into a stable, and made a bed for himself on the hay, which he found in the manger.

Now this hay had been placed there by the farmer for his two horses, which were hard at work in the fields, while the lazy dog was sleeping.

In the evening the horses returned very tired and hungry. But when they tried to eat the hay, the surly dog barked and snapped at them.

(to be continued)

### 読物

馬槽中ノ犬

犬ガ一度厩ニマデ行キシ而シテ枯草其レハ彼レガ馬槽ニ於テ見出セシ所ノ枯草ニ於テ彼自身ニ向ツテ寢床ヲ造リシ

今此枯草ハ怠惰ナル犬ガ眠リツ、有リシ間ニ畠ニ於テ働ニ於テ堅クアリシ所ノ彼ノ二ツノ馬ニ向ツテ農夫ニヨツテ其処ニ置カレテ有ツタ

晩ニ於テ馬ガ甚ダ勞レ而シテ餓エテ歸リシ 併シナガラ若シモ彼等ガ枯草ヲ食フベク試ミシ時ニ意地悪シキ犬ハ彼等ニ於テ吠エシ而シテ咬ミシ

(つづく)

\*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。

第四六号（明治二四九月五日）

#### READING LESSON.

#### THE DOG IN THE MANGER.

(Continued)

At last the farmer came to see what was the matter, and with a whip drove away the dog, saying you might let those eat it who can.

#### THE VIPER AND THE FILE.

A viper once found its way into a blacksmith's shop, and began looking amongst the tools for some-thing good to eat.

(to be continued)

読物

馬槽中ノ犬

(つぎ)

終ニ農夫ガ事柄ハ何デアリシカヲ見ルベク来リシ而シテ鞭ヲ以テ犬ヲ彼方に逐ヒシ汝ハ此等ヲシテ能フ所ノ者ニ其レヲ食ハシメヨト云ヒツ、

蝮蛇ト而シテ鑢

蝮蛇ガ一度鍛治メ屋ノ店ニマデ其道ヲ見出セシ而シテ食フベク善キ或物ニ向テ道具ノ中ニ眺メツアリシ

(つぎ)

\*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。

第四七号 (明治二四年九月二〇日)

READING LESSON.

THE VIPER AND THE FILE.

(Continued)

At last it came to a file which had been left lying on the ground. The viper, never having seen a file before, seemed to think that it must be very nice to eat. So it curled itself round it, and began to bite it.

But the file only laughed, and said, "You must be very foolish to think you can hurt me. Don't you know that I am so hard that I am used to bite iron and steel?"

読物

蝮蛇ト而シテ鑢

(つぎ)

終ニ其レハ地ニ於テ横ハリツツ残サレテアリシ所ノ鑢ニマデ来リシ 蝮蛇ハ決シテ前ニ鑢ヲ見ナシタ所デ其ガ食フベク甚ダ美シクアラネバナヲ考フルベク見エシ 左様ニ其レハ其レヲ廻リテ其レヲ捲キシ而シテ其レヲ噛ムベク始メシ併シナガラ鑢ハ唯ダ笑ヒシ而シテ云ヒシ汝ハ汝ガ私ヲ噛ミ能フト考フルベク甚ダ馬鹿デアラネバナヲ汝ハ私ガ鉄而シテ鋼鉄ヲ噛ムベク用ナラレテアルヲホド左様ニ堅クアルヲ知リナサヌカ

\*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。

『少年園』

第四六号 (明治二三年九月一八日) (ルビはすべて左傍にある)

以蘇菩の事を記す。

今を距ること七年、余は学暇を以て以蘇菩が寓言を訳し、又其伝記なども綴りたることありにき、其外レツシングが寓言、マルチン、ルーテルが喩言等は、あらかじめ訳して、作文の練習とはなしぬ。今は己れが本業あれば、是等の文章は手にも就かず、心にも附かず居りしに、曝書せしむる折、これらの文書、偶ま目に触れそとに当年の生活を憶ひ起さしむることとなり、傍ら当時の友人などを追想すれば、或は黄泉に赴きし者もあり、(飯田流芳とて俱に一書窓に学問せし友人)或は遠



く亜米に航し、実業を修めて未だ帰らざる者もあり、(西村金一、儉香子と号し、俱に文を講じ詩を賦し、互に兄弟視したる朋友、)而して此断篇零冊は歲月を閲すること僅かに六七星霜に過ぎざるも、各人の境遇、各人の思想は自ら変遷を閲したることを憶ひ出す伝手とはなりぬ。爰に当年ものせる以蘇菩の小伝を抄録して、聊か感を書し、以て貴園に寄す、

明治二十三年七月。

閑場不二彦 述。

魯の孔子生るの四五十年前、雅典の統領達拉公老いて梭倫相交り、方に立法を布かんとするの時、(紀元前五百年より六百年の比)小亜細亞、弗黎家の地(或はいふ呂底亞……同じく小亜細亞にありき。……或はいふ徳拉基……今の歐羅巴土耳其……或はいふ沙摩西島)に一異人を生じぬ。其人となりや、軀幹矮小にして、容貌太だ醜くかりき。世に処して貧に窶れたりと雖も、苦に居て志を破らず、天資は英敏夙に學識を備へ、年壯にして身常に坎 壈、時に売られて奴隸となり、或は用ゐられて大夫となり、間関崎嶇の際、無限の経験は此人をして寓言譬喩の妙を以て名を万秋に留めしめたり。それ之を誰とかする。以蘇菩 Aesopos, (Aesop.) 是なり。

然れども以蘇菩が行事は替如として暗きこと多く、詳に尽せる史籍なく、今や考ふべからざるなり、其生地は已に数処あれども弗黎家州の地真に近し、其他は概ね以蘇菩が長く滞留せし所たるに過ぎざるならむ。以蘇菩は年壮なるに及ぶころ、図らざる運命に遭遇し、売られて人の奴となり、日に勞役に従ひ、主の鞭笞を受け一二歳月の間転売せられて主を代ゆること数回、最後沙摩西島の一富豪なるヤドモンが奴隸

となり、之に事ぶこと恭謹なりしが、特爾斐人の之を憐むありて爲めに其身を贖はる。

嘗て之を莊子に知る、哀駘它は其才を以て魯公に信ぜられ闔政、支離、無唇の徒は衛の靈公に説き、甕盎は齊の桓公に説いて、用ゐられたるを。其れ素より漆園が寓言に過ぎずと雖も、然れども徳の長ずるあれば形の醜の忘らるゝは誠に然り。今や以蘇菩が身は奴隸の苦より救はれたり、乃ち其才、其徳、以て権貴の家に説き、以て王侯の心に悦ばれずんば、方に其身を如何せんとするや。

是に於て以蘇菩は其身を扮して、富豪の門を叩き、諸邦に遊説して或は王侯に説き、諷諫する所少なしとせず。時に街頭に出で、衆を集めて、其説を演ぶ、概ね是れ仁義の言にして、彼玻那(バルナス)山頭の乱神怪力には非ざるなり、唯往々諧謔に騁るの癖ありて、怨恨を受くることあり。嘗て滑稽嘲罵、意偶ま特爾斐人に中る、特爾斐人之を聴き、窃かに怨望を懷き、將に報ずるあらんとす。

この時呂底亞邦に一賢王あり、名を格羅索(紀元前五百六十二年)といふ。励精治を圖り、疆土を拓むるに急なり、頻りに人材を登用す。以蘇菩の賢を聴くや、幣を厚くして、之を招き、遂に任用し、官職を授く。

以蘇菩はのち王命を奉じて特爾斐に赴く、其意諸邦の狀態を視察するに在り、或はいふ神語を聴て兵略の方向を定めんとすと、蓋し当時王が拓地の志専らなりしを知るに足るなり。時に特爾斐の僧侶等謂へらく、以蘇菩の来る必ず我が爲に不利なるべし、来らば之を除くに如かずと、而して以蘇菩は之を知らず遂に深谷に擠(おと)されて死す。一史家は其終

る所を知らずと。

史籍邈たり考ふべからずと雖も、以蘇菩の名を以て仮となし、以て記録より脱却せんと欲するは、誣ゆるの甚だしき者なり、齊諧其人は或は之れなからむ、然れども亦彼の希臘古代伝来の談話を、詩史に合綴大成して、和馬羅の名を附したると同一視して、希臘古代よりの千万寓言中秀逸の者を採びて殊更に以蘇菩の名を作り、以て其寓言を大成したる者なりといふは尤も是れ穿鑿家の言にして不正当の者なるなり。

以蘇菩は當時の人を教ゆる懇懃（こんきん）なりき、例を近きに取り、簡に諷意を孕み、絮々たる慢言なく、短刀直ちに墨を摩して、其要を説き、説き終れば断乎として其終結を取れり、而して以蘇菩は其譬喩を概ね実事（その時々）の出来（こと）に徴して作りたり。<sup>（第一、第二章を参考せし）</sup>故に當時人情風俗の一反射鏡画（フレックスピルド）たるなり。吾後人は此等の同様なる事実を他様に賦写し、或は更に皆無の虚構を事とし、漫に言行を禽獸に仮したるに止まり、この賦詠したる仮想のみよりして一般の真理を説かんとせしなり。而して以蘇菩は已に実事に徴して寓言を賦したれば、実事寓言俱に同様の真理を發揮するを勉め、復た之を發揮したるなり。（レッシング）

以蘇菩が自ら筆を擲りて其寓言の書を編したるやは未だ詳かにせざる所なれども、今ま仮りに以蘇菩自ら之を編せりと定めて、之を考ふるに、其自記せる文字は今日に於て一も吾人の手に伝はらざるなり。而してまた希臘文学の諸集中に散見する絶妙の寓言に以蘇菩の名を冠しあるは吾人の須らく記憶に存すべき所なりとす。

某為レ人何儻。一日歩ニ於公苑一。遇ニ少年一群于レ途。皆大笑曰。彼非ニ以蘇菩之再生一乎。某曰。我固以蘇菩耳。即能使下ニ鳥獸一人語上。意氣揚々而去。

\*原文では左傍にあるルビ。

盤峰樵者稿。

### 『花の園生』

第三四号（明治二十六年十一月）

伊蘇普物語

晚翠禅史訳\*

土鼠と野牛の話  
天氣麗らかなる日野牛がいと心地よく艸原に遊び戯れて楽みける時、土鼠出で来りて烈しく噛み付き傷を負はせければ、野牛以ての外に立腹して土鼠の穴を掻き撥き、只一潰に踏み殺さんと敦圀たる暇に、土鼠再び出で来りて竊と野牛の胸脇に跛ひ上りて、又もや痛く噛き付きたり。野牛烈火の如く焦ら立ちて振り返らんとすれば、土鼠は早くも穴の中に逃れ去りぬ。野牛益々嗥り狂ひて只管に地を攪き乱しつゝある時、土鼠は穴の中に「体軀は大きくとも威張り散らすものにあらず小きものにも油断は出来ぬものぞかし」と嘲りぬ。

盗賊と雄鶏の話

盗賊一夜農家に忍び入りて此処彼処尋ね廻りしかど盗むべき家財絶て見当らざりければ、責めてもの腹癒せにと一羽の雄鶏を捕へ去りぬ。

さて我家に歸りて此鶏を料理せんとする時、鶏哀れなる声して憐を乞ふて曰く「お慈悲には生命ばかりは助けてたべ

候へ我は朝な朝な疾く起き出で、家の人々を覚し夫々の仕事に就かせ候ほどに農家には無くて叶はぬものにて候ふものを」と、盗賊答へて曰く「然ればこそ、猶更に助けて得させまじきぞ、其は爾朝疾く起きて啼き叫びなば我が夜業の妨害にこそなれ」と。  
悪意ある者に道理を聞かすれば却て悪意を増長せしむるの媒となるものなり。

\*目次では訳者は「桜外生」とある。

### 第三五号（明治二六年一二月）

伊蘇普物語

桜外生 訳述

#### 鷹と鶯の話

春の日麗らかなる時、鶯が枝に來りて得意にホー法華經を轉りけるに何処よりか嚴めしき鷹來りて矢庭に鶯を攫み去らんとす鶯驚き懼れて「願くは我が命助け給はれかし此小やかなる我が身、卿の餌食の足にもなり候まじ他には我より大きやかなる鳥も多からむものを」と哀しみ訴へければ鷹は冷笑ひて「拙者の眼中に入らざる鳥を目的にして掌中の餌食を見のがす無慮があるか」

#### 鳩と鳥の話

籠の内に閉ぢこめられたる一羽の鳩あり或日その籠に向ひて己れの自慢話を為しつゝある時籠の上に一羽の鳥ありて之を聞き居たりしが頓て「籠の中に閉ぢこめらるゝ身分で今の自慢が云はれた義理でもあるまいチト自由に空飛ぶ鳥を見てもの云ひなさい」と嘲けりしとぞ

### 『少文林』

#### 第二卷第五号（明治二七年三月三日）

##### ◎蛙の演説

久津 見 蔵 村

或る所に頗る大なる池がござつた、然るに或日この所へ大勢の子供が遊びにまゐつて、何にか面白い事はないかと、遊びの相談をして居た、所が此の池の中には、多くの蛙が棲んで居つて、水面に浮んだり、沈んだりして樂氣に遊んで居る、子供は之を見付けて、ヤア蛙が沢山に居る、彼等に石を投付けて見やうではないか、能く當つたものが傑出のだけ、早くやり玉へと云ひ、大勢の子供が我も我もと、蛙を目掛けて石を投げ掛けたから、蛙の方では溜らない、鼻柱をグシヤとやられるもあれば、例の飛び出した眼をゴツンと云はされるもある、其の危険誠に云ふ可らざる次第と相成つた、子供は之を嬉しがつて居れど、蛙は一家一族の滅亡の時にありと悲んで居る、イヤハヤ憫然な有様と相成つた、所が年を経た蛙の親方が、水面にヒヨコと立ち現はれ、子供衆諸君少し待つて下さい、諸君が今為さる所は、何程私共に残酷であるかと云ふ事を御考へが願ひたい、諸君は御楽みでござらうが、私共は誠に死ぬ苦みで居ります、何にも私共は諸君の害をするではなし、斯様な目に会はされるは、誠に迷惑千万でござる、若し人間よりも大きな悪戯者があつて、人間を斯様な目に会はせたらば、諸君はどうなさる、イヤサ人間はどうなさる、少し御推察が願ひたいと云つた、流石の悪戯な子供も、此の理屈に詰つて、ヒヤ／＼御尤も／＼と云つたなり、散々になつて仕舞ふた、何んと読者、諸君、蛙の演説は至極尤もではござらぬか、虎

や狼や獅子のやうな猛獸は、人間の害物だから、已むを得ず殺さねばならんが、蛙や蝸牛や蛇のやうな、無害の小動物を無暗に殺したり、窘めたりするのは、可憐さうではござぬか、牛や馬のやうな人間の役に立つ動物でも、酷く取扱ひ、余計に鞭たり、空腹で居るに走らせたり、或は其の力に余る物を荷はせたり、或は老年になつてヨボ／＼して居るのに荒く使つたりするのは、善しくない事だ、又食用に供する為め、又は有害だからと云つて、殺すにしても、余計な苦みをこせるものでない、何故かなれば、動物でも人間でも、天から受けた生命には別段の變りはなく、矢張生を欲して、死を嫌ひ、苦を厭ふて、樂を欲しますに依つて、夫れを無暗矢鱈に窘めたり、殺したりするのは、天に背く事であるからだ、若し無害の小動物を殺したり、窘めたりする事を、宜いとは云つて放て置くときは、其れが習慣になつて、遂には人間仲間までを殺したり、窘めたりする悪い心を、起すに至るものだ、之れだから諸君、動物に対しても決して無慈悲な事をしては、相成りませぬぞ  
(挿絵)

## 『少年新誌』

第二号 (明治三〇年七月)

◎インソップ物語意解及註釈 \*

AESOP'S FABLES.

### THE WOLF AND THE LAMB.

One day a Wolf and a Lamb happened to come at the same time to drink from a brook that ran down the side of the mountain.

The Wolf wanted very much to eat the Lamb, but meeting him, as he did face, to face\* he thought he must find same excuse for doing so.

So he began by trying to pick a quarrel\*, and said angrily, -

"How dare you come to my brook and muddy the water so that I cannot drink it? What do you mean?" "The Lamb\*, very much alarmed, said gently "I do not see how it can be that I have spoiled the water. You stand higher up the stream, and the water\* runs from you to me, not from me to you."

"Be that as it may," said the Wolf, "you are asascalcathe\* same, forlhave\* heard that last year you aid\* bad things of me behind my back."

"Oh, dear Mr. Wolf," cried the poor Lamb, "hlat\* could not be, for a year ago I was not born."

Finding it of no use to argue any more, the Wolf began to snarl and show his teeth. Coming closer tothe\* Lamb, he said, "You little wretch. \* if it wasnot\* you, it was your father; so it's all the same," and he pounced upon the poor Lamb, and ate her up.\*

When people mean to do bad anl\* cruedthings\* they can easily make excuses for it.

\* 目次には「伊蘇普物語……同人」とある。「同人」は「S.F.」なる人物。

Stickney 原本との校異を示すと以下のとおり。  
face, to face --- ,face to face,    quarrel --- quarrel  
Lamd --- Lamb    wate --- water



arascleathe -- a rascal all the forthave -- for I have  
aid -- said hat -- that tothe -- to the  
wasnot -- was not wretch. -- wretch, up, -- up.  
and -- all cruelthings -- cruel things,

### 意 解

狼と小羊

或日、狼と小羊とが、山の傍を流れ居る小河にて、水を飲  
まんと、偶然同時に来り遇へり。狼は非常に此小羊を喰は  
んと欲したりしも、去り逆、今斯様に、面のあたり出遇ふて居  
なれば喰はんとするには、何か托辞を見出さざるを得ずと考へ  
たり。そこで先づ喧嘩をしかけて見んと為し、怒りて云へり。

「なぜ、おまへはおれの小河へ来て、おれの飲めないほど、こ  
んなに水を濁らしたか。全体御前はどのような存じ寄りで斯  
くしたのか」

と、小羊は痛く駭き怖れ、静かに

「私が此水を悪くしたとはどうして、左様なことであるの  
か、私には思ひもよらぬ事です。あなたはすつと高い水上に  
おいでなされて居て、水は、あなたの方から私の方へ流れる  
ので、私の方からあなたの方へ流れるのでは、ないのです。」  
と答へたり。狼は、

「『其事はどうあるに致せ、其れに干はらず矢張お前は  
奸者だ、なぜと云ふに、お前は、昨年蔭でおれの事を悪く  
云ふたといふことを聞いたことがある。』」  
とぞいで哀れな小羊は叫び出せり。

「左様なことのある筈は御座りませぬ。一年まへはまだ

私は生れませぬでした。」

進んで彼此論ずるは、益なきことと思ひ、狼は、唸りて齒をむ  
き出し小羊の傍へ、近寄りて、云へり。

「ウヌ小癩な悪人め、若しウヌガそふ言ふたでないなら、ウ  
ヌの親父がそう云ふたのだ、どつちでも、其れはおなじこと  
ある。」

と遂に狼は、小羊を攫まへて喰ひ尽くせり。

人若し不良残酷ナル事ヲ為サント欲セバ、容易、二  
コレガ口実ヲ作り得ベシ。

註 釈

(省略)

第三号 (明治三〇年九月)

◎インツプ物語註釈及意訳\*

### THE DOG AND HIS SHADOW.

A dog once had a nice piece of meat for his dinner.

Some say that it was stolen, but others, that it had been given  
him by a butcher, which we will hope was the case.

Dogs like best to eat at home, and he went trotting along  
with the meat in his mouth, as happy as a king.

On his way there was a stream to cross, and as the water  
was still and clear, he stopped to take a look at it.

What should he see, as he gazed into its bright depths, but  
a dog as big as himself, looking up at him, and lo! the dog  
had meat in his mouth.

"I'll try to get that," said he, "then what a feast I shall



have." As quick as thought\* he snapped at the meat, but in doing so he had to open his mouth, and his own piece fell to the bottom of the stream.

Then he saw that the other dog had lost his piece, too.

He went sadly home. That day he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were?

\*目次には「インソップ物語（意訳及註釈）」とある。

Stickney 原本との校異を示すと以下のとおり。

thought — thought

## 註 釈

(省略)

## 意 訳

犬あり、嘗て昼食に甘き肉の一片を得たり。或人は曰ふ、こは盗みたる物なりと、されど又他の人々は、此肉は屠者が与へたるものなりと云ふ、余輩は後の方が事実なることを望むものなり。

凡そ犬は、家に居て食事するをいとも好むものなるに、今彼れは王者の如くに幸はひて、其肉を口にくはへ、前方にと駈け進みぬ。

途にあたり、渡るべき一条の小河ありき、水静かにして澄わたりたりしかば、水面を一眺めせばやと立ち止まれり。今や彼れ其透明なる深みを睇視したる時、見るべかりしものはそも何物にてありしぞ、彼れはおのれを見上げつゝある、己れと等しき大さの犬を見たりき、且つ視るべし、其犬も又口に肉をくはへ居たりけり。

「其肉を取つてくれよう、そうするとどんな御馳走になれるだろう」と彼れは云ひぬ。彼れはしか思ふや否や、すばやく其肉に咬み付かんとしたりしが、さて斯くなすには、己れこの口を開かざるを得ざるを以て、遂に己れこのくはへ居たりし肉を、河底へ落したり。

而して、彼れは他の犬も又其肉を失ひたるを見て、すぐぐと家に還りけり。

其日彼れは只、喰はんどの考を抱きたるのみに止まりて、其考の如く喰ふことを得ざりき、諸君は其考に付きて（善かりしか、悪しかりしか）如何に思はるゝか。

(以下次号)

第四号（明治三〇年一一月）

## ◎インソップ物語註釈及意訳

### THE FOX AND THE LION.

A little fox was out playing one day, when a Lion came roaring along. "Dear me," said the Fox, as he hid behind a tree, "I never saw a Lion before. What a terrible creature! His voice makes me tremble."

The next time the Fox met the Lion, he was not so much afraid, but he said to himself, "I wish he would not make such a noise!"

The third time they met, Fox was not frightened at all. He ran up to the Lion, and said, "What are you roaring about?" And the Lion was so taken by surprise, that he walked away without saying a word.

(挿絵)

注 釈

(省略)

意 訳

一日小狐、外に出で、遊び居たりしに、前方へ一匹の獅、咆哮して歩み来れり。狐は木蔭へかくれて云へり、「オヤマー是迄一度も獅を見たことがなかつたが、なんと恐ろしい動物ではないか、あの声を聞くとからだがぞつと慄へる」と。其後此狐かの獅と出遇ひたりしが、其時は、以前ほどに畏懼せざりしか併し「あんな声をせなければよいのに」と独言を云へり。其後第三回目に出遇ひたりし時には、最早毫も驚かざりき、獅の処へ走り出で云へり、「あなたは、何をほえて居ますか」と、獅は意外のことに驚かされ、一語も言はずして行き去りぬ。

訳者曰く、What this little story teaches us? 此短き物語は如何なることを吾人に教ゆるか。

○貪欲太郎嫉妬之助の話

今はむかし、貪欲太郎嫉妬之助といふ二人ありけり、頃しも夏のことなりしが、をのれらと同一やうに、世をわたるねぢけもの、あるは馬鹿もの、住居を尋ね求めむとて、二人してさまよい出にけり。道すがら、おのが容貌の恐ろしく醜きこと競ひ争ひて、二人りがなかに、愛情とてはつゆなかりけり。物凄く顔色蒼白き貪欲太郎は、背と肩とを折曲げて、物入れたる箱をいだきしめ、誰れかこれへ目を注ぐものやあらむかと、たえず其鍵を凝親居りぬ。嫉妬之助は、妬ましげに円くなした

る眼を、一秒間も其箱より放たず、心のうちには、此箱は必ず先き輝く金銀もて充てるならむと考ふ。貪欲太郎は、わが貯へはいくらありてもまだ／＼足らぬとのみ嘯きつゞけつ、嫉妬之助は、きら／＼する眼を張り詰めて、羨ましげに黄色なる歯を喰ひしぱりつ、かれはおのれよりいづも／＼物多く持つ、とのみ呻吟きぬ。かくおのがまにまに宝櫃の事をのみに想ひ歩みけるほどに、不意に希望の神が、目の前に立ち居るを見つけて、二人りはいとも驚きぬ。希望の神二人連にいふやう、名譽にても、宝にても、はた何なりとも、ほしき物を願ひ望みたまへ、そを賜はらん、たゞし後ちに望む人には、先きの人の願ひたるものを、二倍にして、与へんといふ。世界の宝ほしがる、はた、妬み羨ましがるをのこだち、かくの如き折に出遇いなば、いかにしてかよからん、想ひみるべし。太郎も助も低くさ／＼やきぬ、世にありとある、善きもの、宝をえてしかな、されど、のちにかたる人は、そか二倍をえるものを、とて、たはやすく言ひもせで、まどひあへり。嫉妬之助は、己れ先きに言ひいで、のちに太郎が己の二倍を得ば妬ましき限りなりと思ひぬ。貪欲太郎は、嫉助に先づ望ませてのちにおのれが二倍を得んとはたくらみぬ。されば互に顔見まもりて、いつ言ひいづべくもあらず、希望の神たえかね、さるにても斯くして、一日を空しくくらすときはよしなきことなり、街道にて顔かたち羨しくらうたき人々とかたりあふ、よその見るめもいかゞあらむと、いたくはらだちけり。竟に嫉妬の助、さきに言ひ出で待ちまうけたる貪欲太郎をば、底意わるき笑もて嘲りつ、わがねがひと申し侍るは、他にあらず、我が一方の眼を盲になしたまはれとそ言ひたりける、嫉妬の一念まことにさもあるべき事なり。

(挿絵)

## 『羽陽之少年』

第六号 (明治三五年二月二五日)

かうもりの二心

霞山子

ある時小鳥と鼠とが、互に仲間をあつめて、合戦をはじめました。この合戦を見てゐたかうもりは、どちらへ身方をしようかと、しばらく様子を見眺めてゐました。そのうちに、小鳥の方がつよに見えたから、かうもりは、「我れは羽があつて小鳥に似たから」とて、小鳥の身方になりました。

やゝあつて、鼠の方にかちうが見えて来ました。するとかうもりは、またいふよ、「我れは鼠に似たから」とていつのまにか、うらざりして鼠の身方になりました。

れ\*2 かよーにして、はげしく戦ひましたが、両方互につかれましたから、つひになかなかはりしてわか\*2 ました。

これから小鳥も鼠も、かうもりの二心の行をにくんで、仲間に入れません、もし見つけることがあろうならすぐいじめてやりますから、かうもりは始終あかるい所へもでられないで、ほら穴になどすみ、小鳥等の居ない折にばかりちよい／＼で餌をさがすよーにして居るのださうです。

\*1 「め眺」は「眺め」の誤り。

\*2 「れ」の位置の誤り。どちらも行頭に当たる箇所ので、一行ずれる。

## 『少女智識画報』

第一号 (明治三八年九月一日)

(挿絵)

狐と鶴のお伽話 (イソップ)

鶴が、田において、餌食を求めているのを、狐が見つけて、一つ、たばかつてくれよーと思ひ、『鶴さん／＼、私の家に往きませんか、お前さんに御馳走するものがあるから』といひましたので、鶴は喜んで、一緒に狐の家に往きました。

狐は、平たい金皿に、粥を少しばかり出して、『お前さんは、堅い物は食べられまいから、やわらかな物を作りました。さあお上り』といひますので、鶴は、たべよーとしても、長くて細く堅い嘴ですから、どうしても食べられません。狐は、『お腹もすいてる時刻だに、何とて食べませんか。お前さんが食べぬなら、たゞ捨てるも勿体ないから、私が頂いて仕舞ひましょー』と言ふて、する／＼と食べて仕舞ひました。

鶴は、くやしがりて、色々に考へ、其の次に逢つた時、『お前さんに上げよーと思つて、取つてた物がありますから』とて、自分の家に連れ来り、徳利の様に口の細い入れ物によい香のする食べものを入れて、出しました。

鶴の嘴なら此の入れ物から食られますけれど、狐の口では食ることができません。狐は食べた／＼も、食べよー無く、たゞ、その廻りを、あちこちと歩いているので、鶴『狐さん、お嫌ひですか、なぜ食べないで、舞を舞ふてますか、舞は、食べての後になさ』といふて、かたきを取つたそーです。

この話は、自分のよく出来ることを鼻にかけて、他人を苦めるものでないとの、心なのです。

\* ページ上部に The fable of a crane and a fox. とある。

## 第二号 (明治三八年一〇月一日)

(挿絵)

### ● 黄金の鶏卵

むかし、ある婆さまが、鶏をかツてましたが、黄金の卵を、毎日一つづつ産みますので、喜んでました。

しかし、日に、二つも三つも、産ませたいと、思ツて、その鶏を打ちさいなみましたが、矢張り一つきり産みません。

婆さまは、じれたく思ひまして、『この鶏のお腹には、黄金の塊りがあるであらう、お腹を切りさいて取らう』と、悪いちをを出し、頭のさきから、脚のさきまで、すツかり切り開いて見ましたが、黄金は少しも見えず、その鶏は死んでしまひましたから、日に一つの卵も、得られなくなりました。婆さまは、一つづつでもよかつた、鶏を殺さなければ……』と、後悔しましたが、もうおひつきません。

このお話は、少しづつでも、気永くもうけよ、一度にぐツさりもうけよとすると、元も子も無くすといふまじめなのです。

\* ページ上部に The hen that laid golden eggs (from (sic) Aesop's fables) とある。

## 第三号 (明治三八年十一月一日)

### ● 鷺と烏の智。

ある時、鷺が、蝸牛を食べよーとしましたが、殻堅くて食べられず、殆ど途方にくれてました。烏、通りかゝツて、之を見、『それは、雑作なく食べられますよ。御伝授しませうか。其の代り、半分だけ、私に頂戴。』

といひますので、鷺は喜んで、

『どうぞ教へて下さい。半分上げますから……。』と約束しました。

そこで、烏は、どんな事を教へましたらうか。

『それを、高い空からおとせば、殻は、一も二も無くわれますよ。』

と教へましたので、鷺は、教へられた通りにして、其の半分を、烏に分けたさうです。

鷺と烏とを比べますと、鷺の方が、力も強く、位も高いです。が、烏に劣ること、無いとも申されません。人間も、身分が賤しいからといふて、その人を侮ることは出来ません。

(挿絵)

\* ページ上部に The eagle which was guided by the wisdom of the crow (Aesop's fables) とある。

## 『少年智識画報』

## 第三号 (明治三八年十一月一日)

(挿絵)

### (十二) 鷺と矢

昔し、獵夫が、山で鹿を射止めました、すると、高い樹の梢から、之を見て居た鷺が『うまく中つた、あれは、矢がよいからだ、なんでも弓の矢は、鷺の羽(我々の羽)に限ると自慢しました。暫くすると、獵夫は樹の上に鷺の居るを見出し、狙ひ寄て、又鷺を射落しました、其時に、鷺が『さんねんだ、我の羽で我が殺された』と悔て死にました。

なんでも、他人を傷る道具になると、又自分が傷められる



時節が来ます。

\*ページ上部に The eagle and arrow とある。

#### 第四号 (明治三十八年二月一日)

##### (三) 狼と鶴

「一羽の鶴が、何か食物はないかと、そこ此処歩いて居ると、直ぐ傍の樹の蔭から、「もしお鶴さん、」と呼ぶものがある。鶴は振り返って見ると、「頭の狼が呼だったのであります。」

平生から怖らしい詞遣ひの荒々しい狼が、今日に限って、大層丁寧に呼ぶが、ハテ不思議な事だと、鶴は考へながら傍に行きますと、狼はぼろ／＼涙をこぼして、私は今魚の骨を喉に立て、大変困つて居る処だから、何卒骨を取つて下さい、おれは何でもしますから」となさけない声を出して言ひました。

鶴もお腹が空つた処だし、幸の事だから骨を取つて遣つて、おれに食物でも貰おうと思つて、その長い嘴を、狼の開いた口から喉へ入れて、骨を抜き取つて遣りました。

狼は大喜び、「お蔭で楽に成つた、御苦労々々、」と言つ

たさきりで、さつさと行こーとするから、鶴は驚いて、「おい／＼狼さん、約束のお礼を貰おうぢやないか、」とゆーと、狼は振り返つて、「ナニお礼だと、馬鹿を言うな、お前が嘴を乃公の喉に入れた時、乃公がこの齒で一つ噛みしめたら、夫さきお前の生命は無かつたのだ、夫を無事に助けて貰つたのは誰のお蔭だと思ふ、馬鹿ものめ、」と牙をあらはし、眼をむき出して怒鳴りました。

鶴は其勢に吃驚して、おれどころか生命から／＼逃げて

行きました。

うつかりと悪者の口に乗ると、飛んだ目に逢ふものです。

##### (挿絵)

\*ページ上部に A Wolf and a Crane とある。

##### (挿絵)

##### (四) 太陽と北風

ある時太陽と北風とが出逢ひ、何方が力が強いかとゆー話から、争ひとなり、中々果しが付きませんでした。

すると、其下の方を一人の旅人が通りかつたのです、太陽は北風に向ひ、「お互にどれ程口で言ひ合つても果しがないから、幸ひ今下を通るあの旅人の着物を、脱がした方が勝ちと仕よーぢやないか、」とゆーと北風は承知をして、「宜しい、然らば拙者から始めて、直ぐ脱がして御覧に入れると、」早速支度をしてあらん限りの力を出して、プー／＼／＼／＼と吹き立てたが、旅人は力いつぱい着物の前をかき合はせて、羽織一枚脱ぎもしません、北風は最うぐつたりと勞れ切つて、「乃公がこれ程働らいても脱がない位だから、誰が出ても無効だ々々、」と言ひますと、太陽はにこにこして、夫なら今度は拙者が、奇麗に脱がしてお目にかけると、「言つて、雲間から顔を出し、思ふさま照り付けると、さあ旅人は堪らない、樹の影に休んだが、兎ても扇の風位ではおさまらないので、お暑いく／＼と言ひながら、羽織を脱ぎ着物を脱ぎ、とー／＼丸裸に成つて、夫でも堪らないといつて、水の中に入りました。何といつても、太陽の力には勝てません。

\*ページ上部に The Sun and the North-wind とある。

第六号（明治三十八年二月一日）

(三) 樵夫と河伯

一人の樵夫がある時、河の傍で仕事をして居ましたが、何うした機か斧を河の中へ落しました。大切な職業道具を落しては、明日から稼ぐ事が出来ない、大層悲しんで居ますと、河伯が表はれて其澤（マ）を聞いて、よし／＼探し出して遣う、と言つて河の底に沈んで、やがて金の斧を持て来て、「汝の落したのは是か」と聞きました。樵夫は、「イエ／＼」そんな立派なものではありません」と言うので河伯はまた中へ入つて、今度は銀の斧を持出して見せましたが、いゝ夫でもありませんとゆゝので、三度目に鉄の斧を持つて出て、是かと聞きますと、樵夫は大層喜んで、「はい／＼是で御座いますと、申しました。河伯は、「汝は実に正直者だ、人間は其心を持つて居なければ成らない、」と言つて、其鉄の斧に金銀の斧まで添へて樵夫に下さいました。

樵夫の友達が夫を聞いて、乃公も貰つて来よーといつて、河へ行きまして、故と斧を落して、おい／＼泣て居るとやがて河伯が表はれ、又々其訳を聞いて、河の底へ入り金の斧を持出して、「汝の落したのは是か、」と聞きました。

樵夫は大喜び、「はい／＼夫でございます、難有う存じます、」と手を出して受取ろーとすると、河伯は大層怒り、「汝は実に邪曲な奴だ、そんな心掛で幸福を得られると思ふか、」と言つて、其儘河の中へ姿を隠して了ひました。

欲張の樵夫は金の斧どころか、自分の持つて居た鉄の斧さへ失なして、大層後悔をしたそーです。

(挿絵)

\* ページ上部に A Woodman and the Deity of Rivers. とある。

第八号（明治三十九年四月一日）

(三) 獅子の婿入

ある時獅子が農夫の家に來て、

「おい／＼お父様、お前の家に大層美しい娘が居るそーだが、乃公を其婿にして呉れ、何うだい、」と談判した。

老夫は困つたが、断れば乱暴をするだらうと思つたから、うまい謀計を考へて、

「夫は実に難有い事だ、お前さんが婿に來て呉れ、ば、大層幸福だが、娘がどーもお前さんの、その恐ろしい牙を怖がつていけないから、何卒それを抜いて來て呉れないか、」

とゆーと獅子は大喜び、

「よし／＼、乃公を婿にして呉れ、ば牙でも何でも抜いて了う、と言つて、山に帰り、牙から前歯からそつくり抜いて、さあ是でよしと、すつかり身支度して婿入りにやつて來て、坐敷に通つて、すまし込で坐つて居た。

老夫は是を見て、しめた、と思つて突然大きな棒を持つて來て、「イヤこの獣め、ふとい奴だ、さつさと出て行けッ、」と殴り付けた。

獅子は吃驚して大きに腹を立ち、「この老爺何をする、」と飛びかうて喰ひ付こーとしたが、いけない、牙も歯も抜いて了つたのだから、噛む事が出事ない、そこで始めてこの老夫に、だまされたとゆー事が判つたが、何うも仕方がなく、ほー／＼の体

で山に逃げ帰った。  
獅子のよーな強い獣でも、かんじんの牙を取られれば、やつぱりためである。

(挿絵)

\*ページ上部に A Lion's Marriage (sic). とある。

(挿絵)

(四) 兎と亀

かめ「おい兎公、お前と乃公と歩き競をしようぢやないか。」  
うさぎ「なんだ、乃公とお前と歩き競をしようと、いやぢやないだもんを言つちやいけない、お前のよーに、四つ這で、むづ／＼した者が、なに乃公に勝てるものか。」

かめ「勝てるか勝てないか、一つやつて見よう。」

うさぎ「なまいきな事を言ひなさんな、併し夫程ゆるのなら、相手に成つて遣ろーよ。」

と、そこで兎と亀とが支度をして、ある所まで歩きくらをした。

兎はずん／＼歩いて後ろを見ると、亀は余つ程後れて居る、えこの安排ならもつとゆつくりしてもいい、どれ爰で昼寐でもしようか、と兎は／＼と草の上に寐てつた。

其内最う日も暮れかゝつたので、兎は目をさまし、あゝおそく成つた、どれ／＼出掛よーかと、起上つて道草を喰ひながら、ゆつたりのつたり歩いて、約束の所まで行くと、亀は疾うに來て居て、「おい兎公何うだ、夫でも勝つたか、アハハハ、」と笑つた。

兎は驚いて、え、夫ぢやあ乃公の寐て居る内に先へ來たの

か、」と口惜しがつたけれども、最も致方がなかつた。  
そこでこの勝負は兎の負けと成つたのである。

\*ページ上部に The Race between the Rabbit and the Tortoise. とある。

注

一 吉見孝夫「明治期の雑誌に載つたイソップ寓話」『イソップ資料』第二一〇一八八年一〇月

二 『面白草紙』第八号の笑話は以下のとおり。

●伊蘇普物語の新落語

甲「オイ本郷君、僕は誰れそやに聞いたことがある、実事談の奇は、小説の奇に倍すとか云ふが、成程さう思はることだて大、同じ位ゐるの奇なれば、夫れは必ず実事談の方が、面白いに相違ないことである、小説仮作の物語は、余程奇でなければ、実事談の珍説とは、並び立つて競争は出来ぬことである、就いて思ふに、彼の希臘の伊蘇普物語であるが、其書の説話は、随分奇は奇であるが、素と実事談でござらぬゆゑ、何うも眞の面白味と云ふものがなくて、乙「イヤ何に神田君よ、僕の聞く所は、君の意見と異なつて、確かに伊蘇普は、実事談と聞えたヨ、甲「本郷君其れは否かんでナ、伊蘇普は何うしても実事談ではないヨ、夫れには確かに其証拠がある、乙「其は亦何んな証拠があるのですか、甲「何んな証拠と云つて、君知らんかへ、彼れは素と看板に偽りなし、嘘普物語と云ふではない乎。」

同様の小咄が雷笑子『二十世紀新落語』(松陽堂・

盛花堂、明治三八年二月)にもある。

三 塚崎幹夫訳『新訳イソップ寓話集』(中央公論社、

一九八七年九月)

四 鈴木潤吉「鈴木三重吉とイソップ」(『イソップ資料』第一二号、二〇一九年十二月)

五 関場不二彦の事跡は次の文献に拠る。

秦温信『北辰の如く―関場不二彦伝』(北海道出版企画センター、二〇一一年三月)



# 明治期雑誌掲載イソップ寓話対照表

- 1 寓話の配列は B. E. Perry の *Aesopica* の番号に従った。*Aesopica* にない寓話は、James 本の番号を「J59」のように略記した。James 本、Townsend 本にもなく、Stickney 本にある寓話は、「S5」のように略記した。
- 2 *Aesopica* のタイトル名は、1～471 は中務哲郎訳『イソップ寓話集』（岩波書店、1999 年 3 月）に、472～579 は岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』（国文社、1998 年 1 月）に従った。ただし、漢字表記は極力常用漢字の範囲にとどめるため改めた。他は Perry の *Babrius and Phaedrus* (Harvard University Press, 1965) の英文タイトルを和訳した。
- 3 各雑誌には、次のような略記を用いた。  
R : ROMAJI ZASSHI 教 : 『教育小供のはな誌』 同 : 『DOSHISHA 文学会雑誌』  
女 : 『女学雑誌』 国 : 『小国民』 こ : 『こども』 学 : 『小学生徒之友』  
園 : 『少年園』 幼 : 『幼年雑誌』 家① : 民友社系『家庭雑誌』  
花 : 『花の園生』 文 : 『少文林』 誌 : 『少年新誌』 婦 : 『婦人と子ども』  
羽 : 『羽陽之少年』 万 : 『万年艸』 福 : 『福音新報』  
家② : 由分社系『家庭雑誌』 帝 : 『帝国文学』 を : 『をんな』  
新 : 『新古文林』 画 : 『少女智識画報』 智 : 『少年智識画報』  
英 : 『英語之日本』
- 4 各雑誌の巻号は、漢数字で巻を、算用数字で号を示した。

| Aesopica等の番号とタイトル  | 掲載雑誌と掲載箇所         |
|--------------------|-------------------|
| 4 ナイチンゲールとタカ       | 花35               |
| 9 井戸の中のキツネとヤギ      | 婦三9・家②2           |
| 10 ライオンを見たキツネ      | R16・誌4・英二2        |
| 11 笛を吹く漁師          | 婦三4               |
| 12 キツネとヒョウ         | 婦四10              |
| 15 キツネとブドウ         | 英二10              |
| 17 しっぽのないキツネ       | 教4・こ13・婦三11       |
| 24 腹のふくれたキツネ       | 婦四11              |
| 27 キツネとモルモートの面     | 家①19              |
| 29 炭屋と洗濯屋          | 婦三4・新1            |
| 32 人殺し             | 婦五5               |
| 33 ほら吹き            | 婦三12              |
| 35 人間とサテュロス        | 新3                |
| 40 天文学者            | 婦四4               |
| 42 農夫と息子たち         | R10・婦四5・を五8       |
| 44 王様を欲しがるカエル      | 家①16・英二13・英三7     |
| 45 牛と車軸            | 婦三10              |
| 46 北風と太陽           | R8・婦三2・福405・新1・智4 |
| 49 子牛を盗まれた牛飼いとライオン | 婦三5               |
| 50 イタチとアプロディテ      | 新3                |
| 51 農夫と蛇            | 婦四2               |
| 53 兄弟げんかする農夫と息子    | R2・R19・婦三3        |
| 55 女主人と召し使い        | を四11・新5           |
| 57 老婆と医者           | 婦四4・新5            |
| 58 女とメンドリ          | 新3                |
| 60 老人と死に神          | 新1                |
| 64 犬にかまれた男         | 新3                |
| 65 旅人とクマ           | 学9・婦三11           |
| 67 旅人とおの           | 婦四7               |
| 68 敵同士             | 新3                |
| 69 隣同士のカエル         | 英二6・英二7           |
| 70 カシとアシ           | 婦四7               |
| 75 片目の鹿            | 新1                |
| 77 鹿とブドウ           | 女255              |
| 80 ハエ              | 婦三6               |
| 81 王に選ばれた猿とキツネ     | 婦四5               |
| 85 子豚と羊            | 婦三12              |
| 87 金の卵を生むガチョウ      | 女144・婦四11・画2      |
| 88 ヘルメスと彫刻家        | 新5                |
| 91 じゃれつくロバと主人      | R12               |
| 93 マムシとヤスリ         | 学46・学47           |
| 97 子ヤギと笛を吹くオオカミ    | 幼一14              |
| 98 屋根の上の子ヤギとオオカミ   | R6 婦四4            |

|     |                |                                  |
|-----|----------------|----------------------------------|
| 112 | アリとセンテコガネ      | R4・家①19・婦三4・教5・こニ2・学17・英二11・英二13 |
| 122 | 泥棒とオンドリ        | 婦四10・花34                         |
| 124 | カラスとキツネ        | R14・学45・家①17                     |
| 130 | 胃袋と足           | R10・婦四5                          |
| 133 | 肉を運ぶ犬          | 女136・こ11・家①19・婦三5・誌3・英二3         |
| 140 | 恋するライオン        | 女247・婦三11・智8                     |
| 142 | 老いたライオンとキツネ    | 婦三10                             |
| 147 | ライオンとクマ        | 婦四10                             |
| 148 | ライオンとウサギ       | 婦四10                             |
| 149 | ライオンとロバとキツネ    | 婦四11                             |
| 150 | ライオンとネズミの恩返し   | R1・同13・婦三2・福405・家②1・英二8・英二9      |
| 155 | オオカミと子羊        | R3・家①16・家①19・婦三2・家②1・誌2・英二1・英二2  |
| 156 | オオカミとサギ        | R15・家①19・婦三3・智4・英二11             |
| 157 | オオカミとヤギ        | 学40・英二6・英二7                      |
| 158 | オオカミと老婆        | こ12                              |
| 172 | コウモリとイタチ       | 婦三3                              |
| 173 | きこりとヘルメス       | こ9・婦六2・智6                        |
| 177 | 旅人と薪           | 新5                               |
| 180 | 塩を運ぶロバ         | 婦四2                              |
| 181 | ロバとラバ          | 女159                             |
| 182 | 神像を運ぶロバ        | 新5                               |
| 184 | ロバとセミ          | 婦三2                              |
| 188 | ライオンの皮を被ったロバ   | 万四・英三7                           |
| 191 | ロバとキツネとライオン    | 婦三6                              |
| 193 | 狸師とヒバリ         | 新5                               |
| 194 | 狸師とコウノトリ       | R13・婦三8                          |
| 199 | 子供とサソリ         | 婦三5                              |
| 201 | のどの渴いたハト       | 婦三9                              |
| 202 | ハトとハシボソガラス     | 花35                              |
| 210 | 羊飼いのいたずら       | 婦四1                              |
| 211 | 水浴びをする子供       | 新3                               |
| 212 | 毛を刈られる羊        | 女243                             |
| 213 | ザクロとリンゴとイバラ    | 婦三7                              |
| 214 | モグラ            | こニ1・婦三5                          |
| 224 | イノシシとキツネ       | 婦四7・婦八6・学17                      |
| 225 | 守銭奴            | 婦三12                             |
| 226 | カメとウサギ         | R7・同13・こ12・婦一7・婦三4・智8            |
| 229 | ツバメとハシボソガラス    | 婦三3                              |
| 230 | カメとワシ          | 婦三8・教4                           |
| 235 | アリとハト          | R22・婦四8・婦五6                      |
| 252 | 犬と鶏とキツネ        | R7                               |
| 257 | ライオンとキツネ       | 婦三6                              |
| 266 | 振り分け袋          | 新1                               |
| 276 | 射られたワシ         | 婦四8・智3                           |
| 281 | タナグラのオンドリ      | 婦四5                              |
| 283 | 火を運ぶキツネ        | 婦四10                             |
| 284 | 一緒に旅をする人間とライオン | 婦三7                              |
| 288 | クマとキツネ         | 婦三8・家②2                          |
| 290 | 牛と肉屋           | 婦四2                              |
| 291 | 牛追いとヘラクレス      | 婦三5                              |
| 303 | きこりと松          | R13?                             |
| 305 | 病気の鹿           | 婦四2                              |
| 314 | 太陽とカエル         | 新1                               |
| 322 | カニと母親          | 婦四6・新3・英二10・英二11                 |
| 324 | 病気のカラス         | 新5                               |
| 325 | ヒバリと農夫         | 英二4・英二5                          |
| 326 | 腫病(おくびょう)な狸師   | 婦四11                             |
| 330 | 犬と主人           | 婦三3                              |
| 331 | 犬とウサギ          | 婦四11                             |
| 334 | ライオンの治世        | 婦三3                              |
| 335 | ライオンとワシ        | 婦五5                              |
| 338 | ライオンとイノシシ      | 婦四8                              |
| 339 | ライオンと野生のロバ     | 家①18・家①19・婦四6                    |
| 351 | 子牛と鹿           | R21・婦三6                          |
| 352 | 田舎のネズミと町のネズミ   | 教3                               |
| 353 | ネズミと牛          | 花34                              |
| 355 | 旅人と真実の女神       | 婦五5                              |
| 370 | ラッパ兵           | 新3                               |
| 373 | セミとアリ          | R4・こニ2・家①19・婦三4・教5・学17・英二11・英二13 |
| 376 | 自分を膨らませるヒキガエル  | R13・家①17・婦四4                     |
| 378 | 二つのつぼ          | 新1                               |
| 384 | ネズミとカエル        | R6・こ11・婦四6                       |

|                                   |                   |                     |
|-----------------------------------|-------------------|---------------------|
| 390                               | ハシボソガラスと水差し       | 婦五6                 |
| 394                               | ライオンの子分のキツネ       | 婦五5                 |
| 398                               | カラスと白鳥            | 婦三9                 |
| 413                               | イチジクとオリーブ         | 福405                |
| 419                               | 泥棒と宿屋の主人          | 新3                  |
| 426                               | キツネとツル            | R19・こ二4・幼一3・婦五11・画1 |
| 447                               | 父親を埋葬するヒバリ        | 新3                  |
| 460                               | ロバの陰              | 婦四8・新5              |
| 468                               | 月と母親              | 新5                  |
| 472                               | 高慢ちきなカラスとクジャク     | R5・家①19・万四          |
| 473                               | ウサギに講釈するスズメ       | 家①19                |
| 474                               | 猿に裁かれるオオカミとキツネ    | 家①19                |
| 490                               | ワシとカラス            | 画3                  |
| 499                               | 姉と弟               | 新3                  |
| 503                               | ニワトリのヒナと真珠        | R15・婦三3             |
| 520                               | 大山鳴動して            | R25・婦三8・新1          |
| 532                               | 老犬と狩人             | R5 婦四7              |
| 562a                              | オンドリとキツネ          | 女136 万五             |
| 563                               | ライオンと羊飼い          | こ8・万五               |
| 563a                              | アンドロクルスとライオン      | 学24・婦三7             |
| 566                               | コウモリ              | こ13・羽6              |
| 580                               | 欲張りとなたみ屋          | 誌4                  |
| 613                               | ネズミ、猫のことを協議する     | こ10・婦四7・国1・英三7      |
| 617                               | 男の胸の中の蛇           | R16・婦三7             |
| 702                               | 飼い葉おけの犬           | 学45・学46・婦三10        |
| 716                               | ネズミと雌の子ネズミ、オンドリと猫 | 家①20・英二9            |
| 721                               | 父親と息子とロバ          | 幼一6・帝10             |
| J59                               | 木々とオノ             | 英二11                |
| J130                              | 少年とイラクサ           | 婦四4                 |
| J147                              | 少年とハシバミ           | 婦三12                |
| J172                              | 少年たちとカエル          | 文二5・婦四1             |
| S5                                | 太鼓と香草の花瓶          | 英二6                 |
| S88                               | 猿と猫               | こ9                  |
| イソップ伝(イソップの伝記)                    |                   | 園46                 |
| イソップ伝(財布を拾った人に難癖を付ける話)            |                   | 婦六9                 |
| イソップ伝(イソップが「町までどのくらいかかるか」と尋ねられる話) |                   | 万五                  |

の原本も同様に脱落している。

#### XVII.— The Mice in Council.

1. Some little Mice, who lived in the walls of a house, met together one night, to talk of the wicked cat, and to consider what could be done to get rid of her. The head Mice were Brown-back, Grey-ear, and White-whisker.

2. "There is no comfort in the house," said Brown-back; "if I but step into the pantry to pick up a few crumbs, down she comes, and I have hardly time to run to my nest again."

#### XVII.— 鼠の評議。

1. 或る家の壁に住まつて居た小鼠が、或る晩<sup>あいつ</sup>寄り合つて、家の悪猫の話をし、何うしたら彼奴の厄介払ひが出来ようかと、相談会を開きました。鼠の親分は褐背と灰耳と白髭の三匹でした。

2. 先づ褐背が言ひますには、「此の家は些つとも気楽でない。己れが一寸台所へ這入つて麴包屑を拾はうとすると、あの猫の奴がやつて来て、己れは危ない処をやつと逃げ出して巢へ帰るのだ。』



his head! This is a King indeed. He shall rule over us," and they went joyfully to meet him.

9. But as their new King came nearer, he paused, stretched out his long neck, picked up the head Frog, and swallowed him at a\* mouthful. And then the next — and the next!

10. "What is this?" cried the Frogs, and they began to draw back in terror.

But the Stork with his long legs easily followed them to the water, and kept on eating them as fast as he could.

11. "Oh! if we had only been — " said the oldest Frog. He was going to add "content," but was eaten up before he could finish the sentence.

12. The Frogs cried to Jupiter to help them, but he would not listen. And the Stork-King ate them for breakfast, dinner, and supper, every day, till in a short time there was not a Frog left in the lake.

\* a は Stickney の原本では one。

#### XVI.— The Ass in the Lion's Skin.

1. An Ass once put on a Lion's skin. It did not fit him very well, but he found that in it he could frighten all the timid, foolish little animals, so he amused himself by chasing them about.

2. By and by he met a Fox, and tried to frighten him by roaring.

"My dear Donkey,\* said the wise Fox, "you are braying, and not roaring. I might, perhaps, have been frightened by your looks, if you had not tried to roar; but I know your voice too well to mistake you for a Lion."

\* 二重引用符が脱落している。Stickney

きました。

9.ところが、今度の王様は傍へ来ると立止まって、長い頸を差し伸ばし、親分の蛙を啣へ上げて一口に呑んでしまいました。其れから次へ次へとずんずん蛙どもを食べました。

10.蛙どもは『此れは何事だ。』と叫んで、恐れて引つ込み出しましたが、鶴は、長い脚でわけなく蛙どもを追つ掛けて行つて、ぐいぐい食べました。

11.一番年上の蛙は『あゝ、己れ達はたゞもう……』と言ひ掛けましたが、『満足さへして居たら善かつたものを』と言ひ切らぬうちに、食べられてしまいました。

12.蛙どもは大声に叫んでヂュピタの命に助を求めましたけれども命は御聞き入れになりませんでした。そこで鶴王は、朝飯に、昼飯に、夕御飯に、毎日毎日蛙を食べましたから、間もなく池の蛙が一匹も残らぬ様に無くなりました。

#### XVI.—獅子の皮を着た驢馬の話。

1.我(ママ)る時驢馬が獅子の皮を着ました。あまりよく体に合はなかつたけれども、此の皮を着て居れば臆病者の愚かな小さい獣を皆嚇かす事が出来ると思ひましたから、獣を追ひ廻して面白がつて居りました。

2.斯くするうちに狐に会ひましたから、一つ嚇かしてやらうと獅子の声色を使いました。

所が狐は中々伶俐ですから、『や、驢馬君、それや驢馬の声だよ獅子の吼声ぢやない。君が獅子の声色なんか真似なかつたなら、其の顔付で嚇かされたかも知らぬが、僕は君の声をよく知つて居るから君を獅子には間違へないよ。』と言ひました。

4. It fell with such a splash that the frogs were frightened, and hid themselves in the deep mud under the water.

5. By and by, one braver than the rest peeped out to look at the King, and saw the Log, as it lay quietly on the top of the water. Soon they all came out of their hiding places, and ventured to look at their great King.

6. As the Log did not move, they swam round it, and at last one by one hopped upon it.

"This is not a King," said a wise old Frog; "it is nothing but a stupid Log."

\* Stickney の原本では were の後に once がある。

つて水の中へ大きな丸太をお投げになりました。

4. 丸太はバサッと大きな音を立て、水をはねどばして落ちたので、蛙は驚愕して、水の底の泥の中へ隠れました。

5. 暫く立つてから、一番勇気のある蛙が顔を上げて王様を覗いて見ると、例の丸太が水の上に静かに浮いて居ました。やがて蛙は皆んな隠れ場から出て来て、恐はい乍らも自分達の大王様を見ました。

6. 丸太は動かないものですから、蛙達は其の周囲を泳ぎ廻つて、とうとう一匹々々其の上へ跳び上がりました。

『此れや王様ぢや無いや。何でも無いよ。愚図の丸太めだい。』と利口な年寄の蛙が申しました。

第三卷第七号（明治四三年六月一日）

## ÆSOP'S FABLES.

### いそつぶ物語研究

#### （第 十 三）

（第式巻第拾参号『いそつぶ物語詳解』より続く）

7. Again they sent to Jupiter, and begged him to give them a King who could rule over them.

Jupiter did not like to be disturbed again by the silly Frogs, but this time he sent them a Stork, saying, "You will have some one to rule over you now."

8. As they saw the Stork solemnly walking down to the lake, they were delighted.

"Ah!" they said, "see how grand he looks! How he strides along! How he throws back

長 谷 川 元 吉

7. 蛙どもは再びヂュピタの命の所へ使を遣つて、私等の支配が出来る王様を下さいと頼みました。

ヂュピタの命はまた馬鹿な蛙がやつて来てうるさいと思召したけれども、『さあ、支配をする王様を上げませう』と言つて、今度は大きな鶴を送つて御遣りになりました。

8. 蛙どもは鶴が厳然として湖水の方へ歩いて来るのを見て喜びました。

『まあ、御覧よ、素敵だね。あの大腿に歩くこと、反身になつて。此れや全く王様だ。支配をして貰はう。』と言つて大に喜びながらお迎ひに行

said she, "will you not lend me a little food? I will certainly pay you before this time next year."

4. "How does it happen that you have no food of your own?" asked an old Ant. "There was an abundance in the field where we lived all Summer, and your people seemed to be active enough. What were you doing, pray?"

5. "Oh," said the Grasshopper, forgetting his\* hunger, "I sang all the day long, and all the night, too."

6. "Well, then," interrupted the Ant, "if you found it so gay to sing all the Summer, you may as well try to dance away the Winter," and she went on with her work, all the while singing the old song:—

"We ants never borrow; we ants never lend."

\* 2では she とあるので、his は her とあるべきところ。Stickney の原本も his。

#### XV.—The Frogs Who Asked for a King.

1. There were\* some Frogs who lived together in a beautiful lake. They were a large company, and were very comfortable, but they came to think that they might be still happier if they had a King to rule over them.

2. So they sent to Jupiter, their god, to ask him to give them a King.

3. Jupiter laughed at their folly, for he knew that they were happier and better off as they were; but he said to them, "Well, here is a King for you," and into the water he threw a big Log.

少し食べ物を貸して呉れませんか。来年の今頃にならぬうちにきつと返しますよ。』

4.『君達は何うして自分の食物が無い様な事になつたんですか。夏中住まつて居た畑にどツさり食物が有つたぢやありませんか。そしてお家の方は随分はきはきして居らした様ですが、一体何をして居らしたんですか。』と年寄りの蟻が申しました。

5. 蠡斯は飢を忘れて申しますには、『私は昼は日ねもす、夜も夜もすがら、楽しく唄ひ暮らしまして』

6.『はあ、左うですか』と蟻は蠡斯の言葉を遮ぎつて、『夏中唄ふのが其んなに面白かつたのなら、冬は一つ踊つて暮して見たらばいいでせう』と言つて、又仕事をつゞけて致しました、始終此の古い歌を唄ひながら;—

『吾等は、蟻は、借りもせず、

吾等は、蟻は、貸しもせず。』

#### XV.—王様を望んだ蛙の話。

1. 蛙が一所に或る美しい池に住まつて居ました。余程な大勢で愉快に楽しんで居りましたが、王様が有つて自分達を支配してくれれば猶ほ幸福になれるだらうと考へる様になりました。

2. そこで、蛙は自分達の神様であるジユピタ<sup>みこと</sup>の命<sup>みこと</sup>の所へ使を遣つて王様を一人下さいと頼みました。

3. ジユピタ<sup>みこと</sup>の命<sup>みこと</sup>は蛙達の愚かなのをお笑ひになりました。其れは命<sup>みこと</sup>は蛙は今のまゝで王様を戴かずに居るのが王様が有るよりも幸福であるといふ事を知つて居らしたからです。けれどもジユピタ<sup>みこと</sup>の命<sup>みこと</sup>は『よろしい、ソラ王様をあげよう』と言

1. Once upon a time a man came to a forest to ask the Trees if they would give him some wood to make a handle for his Axe.

2. The Trees thought this was very little to ask, and they gave him a good piece of hard wood. But as soon as the man had fitted the handle to his Axe, he went to work to chop down all the best Trees in the forest.

3. As they fell groaning and crashing to the ground, they said mournfully one to another, "We suffer for our own foolishness."

#### XIV.—The Ants and the Grasshoppers.

1. The Ants and the Grasshoppers lived in the great field. The ants were busy all the time gathering a store of grain to lay by for Winter use. They give\* themselves so little pleasure that their merry neighbours, the Grasshoppers, came at last to take scarcely any notice of them.

\* give は Stickney の原本では gave.

第二卷第一三号（明治四二年一二月一日）

#### ÆSOP'S FABLES.

#### いそつぶ物語詳解

（第 十 二）

#### XIV.—The Ants and the Grasshoppers.

2. When the frost came, it put an end to the work of the Ants and the merry-making of the Grasshoppers. But one fine Winter's day, when the Ants were employed in spreading their grain in the sun to dry, a Grasshopper, who was nearly perishing with hunger, chanced to pass by.

3. "Good day to you, kind neighbour,"

1. 或る時一人の男が森へ来て、森の樹に向つて、斧の柄を拵へるのだから、木材を少し呉れないかと申しました。

2. 森の樹達は、此れやお安い願だと思つて、堅い良い木片きれを男にやりました。所が其の男は斧に柄をはめるや否や、また森へ行つて二番良い樹を悉く切り倒しました。

3. 森の樹達は呻きながら土地へどさんと落ちてお互に悲しさうに話し合ひました、『己いら、まあ、自分の愚かさで苦しむのだ』と。

#### XIV.—蟻と蠡斯との話。

1. 蟻と蠡斯とが大きな畑に住まつて居ました。蟻は、冬ごもりの準備に穀物を集めるので始終忙しく、少しも遊び楽しむ様な事が無かつたから、近所に住まつて居る陽気な蠡斯は蟻を相手にしない様になりました。

長 谷 川 元 吉

#### XIV.—蟻と蠡斯との話。（つゞき）

2. さうするうちに霜が降る様になつて、蟻の仕事も蠡斯の遊びもお終しまひになりました。所が或る天氣の好い冬の日しむひに蟻が穀物を日向に広げて干して居ますと、殆んど餓え死にしかつた蠡斯が、其所を通り掛かりました。

3. 蠡斯が申しますには『蟻さん今日は。あなた



ÆSOP'S FABLES.

いそづぶ物語詳解

（第 十 一）

長 谷 川 元 吉

XI.— The Crab and Its Mother

4. The little Crab smiled. "When you learn to do it yourself, you can teach me," he said, and he went back to his play.

5. Example is better than precept.

XII.— The Wolf and the Crane.

1. One day a Wolf, who was eating his dinner much too fast, swallowed a bone, which stuck in his throat, and pained him very much. He tried to get it out, but could not.

2. Just then he saw a Crane passing by. "Dear friend," said he to the Crane, "there is a bone sticking in my throat. You have a good long neck; can't you reach down and pull it out? I will pay you well for it."

3. "I'll try," said the Crane. Then he put his head into the Wolf's mouth, between his sharp teeth, and reached down, and pulled out the bone.

4. "There!" said the Wolf, "I am glad it is out; I must be more careful another time."

"If you will pay me, I wilt\* go now," said the Crane.

5. "Pay you, indeed!" cried the Wolf. "Be thankful that I did not bite your head off when it was in my mouth. You ought to be content with that."

\* wilt は Stickney の原本では will.

XIII.— The Axe and the Trees.

XI.—蟹と其の母蟹との話。（つゞき）

4. 子蟹は此を見て笑ひました。『お母様が自分で真直に歩ける様になつてから教へるがいゝや』と言つて復た遊びに行きました。

5. 講釈するよりもやつて見せるが善い。

XII.—狼と鶴との話。

1. 或る日狼が余り急いで御飯を食べたので、骨を呑んで喉へ立つて大変痛みました。抜かうとしたけれども抜けませんでした。

2. 丁度其の時鶴が通り掛かつたのを見て『や鶴君、僕は喉へ骨が引掛かつた。君は随分頸が長いから、僕の喉へ差し込んで骨を抜いて呉れませんか、御礼はどツさりますよ』と申しました。

3. 『一つやつて見よう。』と言つて鶴が自分の頭を狼の鋭い歯の間から口の中へ入れて、ずツと喉の奥まで嘴を差し込んで骨を抜きました。

4. 『やあ、骨が抜けて喜しい。今度はもツと気を付けねやならん』と狼が申しますと、鶴は『御礼を払つて下されば僕はもう行きませう』と申しました。

5. すると狼が大きな声で申しましたのには、『お礼を払へツて、まあ。お前の頭が僕の口の中へ這つて居た時に僕がお前の頭を噛み切つてしまはなかつた(ママ)のを有難く思へ。其れでお前は満足するがよい。』

XIII.—斧と樹との話。

would be acceptable, when, looking up, he spied some great clusters of ripe, black grapes, hanging from a trellised vine.

2. "What luck!" he said; "if only they weren't quite so high, I should be sure of a fine feast! I wonder if I can get them? I can think of nothing that would refresh me so."

3. Jumping into the air is not the easiest thing in the world for a Fox to do; but he gave a great spring, and nearly reached the lowest clusters.

"I'll do better next time," he said.

4. He tried again and again, but did not succeed as well as at first. Finding, at last, that he was losing his strength, and that he had little chance of getting the grapes, he walked off slowly, grumbling, "The grapes are sour, and not at all fit for my eating. I'll leave them to the greedy birds. They eat anything."

#### XI — The Crab and Its Mother.

1. "My child," said a Crab to her son, "why do you walk so awkwardly? If you wish to make a good appearance, you should go straight forward, and not in that one-sided manner."

2. "I do wish to make a good appearance, mamma," said the young Crab; "and if you will show me how, I will try to walk straight forward."

3. "Why this is the way, of course," said the mother, as she started off to the right. "No, this is the way," said she, as she made another attempt, to the left.

た丁度其時に上を見たらば、実れて黒くなつた葡萄の大きな房が葡萄棚の上を逼つて居る蔓から釣る(ママ)さがつて居りました。

2.『これや有難い。たゞもう少し低けれや素敵な御馳走を食べられるんだけどな。其れとも取れるか知らん。こんな旨まいものは外に無さそうだぜ。』と申しました。

3. 一体空に跳び上がる事は狐にとつては楽な事ではありませんけれども、彼は一跳び高く跳んで、一番下の房まで殆んどどきました。

『今度はうまくやろう』と言つて、

4. 幾度も跳んで見ましたが初め程うまく跳べません。力は段々抜けるし逆も葡萄を取れる見込みがない事が解りましたから、ぶつぶつ言つて逃げました。『葡萄は酸ッぱくて己れの口には合はないから、食辛棒の鳥たちに遺して置いてやろう。彼い奴等は何でも食べるから。』

#### XI. 蟹と其の母蟹との話。

1.『坊や、お前は何故そんな無恰好な歩き方をするんだね。様子をよくしようと思へば其んな横這ひをしないで、前へ真直ぐ歩くんですよ。』と蟹が其の息子に申しました。

2. すると蟹が申しますには『其れやおつ母様、僕も様子をよくし度いんですとも。おつ母様が仕方を教へて下されば真直ぐ歩きませう。』

3.『なに、わけない事だ、無論斯うして歩くんです。』と言つて母蟹は右の方へ歩き出しましたが、『いや斯うだ。』と言つて今度は左の方へ歩きました。

2. "All at once he stretched his long neck, and opened his mouth so wide, and roared so loud, that I thought he was going to eat me up, and I ran home as fast as I could. I was sorry that I met him, for I had just seen a lovely animal, greater even than he, and would have made friends with her. She had soft fur like ours, only it was gray and white. Her eyes were mild and sleepy, and she looked at me very gently, and waved her long tail from side to side. I thought she wished to speak to me, and I would have gone near her, but that dreadful thing began to roar, and I ran away."

3. "My dear child," said the mother, "you did well to run away. The fierce thing you speak of would have done you no harm. It was a harmless Cock. But that soft, pretty thing was the Cat, and she would have eaten you up in a minute, for she is he\* worst enemy you have in the whole world."

\* he は the の t の誤脱。Stickney の原本では the。

第二卷第一〇号（明治四二年一〇月一日）

## ÆSOP'S FABLES.

### いそつぶ物語詳解

#### （第 十）

#### X.—The Fox and the Grapes.

1. It was a sultry day, and the Fox was almost famishing with hunger and thirst. He was just saying to himself that anything

ました。

2.『急に長い頸を伸べて、口を大きく開いて、それや大変な声で吠えましたから、此れは僕を食べてしまふのだと思つて、一生懸命で駈けて帰りました。あの奴に出ツくはさなかつたらよかつたんですけどね、といふのは、其のつい前に、もつと大きい可愛らしいものに会ひましたから、御友達になる所であつたのです。其の可愛らしいものは、たゞ灰色と白との斑な所が違つてだけで、やツぱり僕達のと同じ様に軟かい毛皮を着て居ました。柔和な睡むような眼をして居ましたが、僕をおとなしい眼付きで見て、長い尾をあちこちへ振りました。僕に何か話し度がつてる様でしたから僕は其の傍へ行かうと思ひましたけれども、あの恐はい奴が吠え出したので逃げました。』

3.母鼠は此を聞いて申しました、『お前は逃げて来てよかつた。お前の謂ふ其の猛いものは鶏といふもので何も害をするのではなかつたらう。けれどもその温和しい綺麗なものは直きにお前を食べてしまふ処であつた。あれは世界中で一番悪いお前の仇敵だから。』

長 谷 川 元 吉

#### X.—狐と葡萄との話。

1.或日のこと大変蒸し暑かつたので、狐は餓えと渴きとの為に殆んど死にかかつて居りました。何でもいから食べ度いと独言を言つて居りまし

4. It befell the great Lion, not long afterward, to be in as evil a case as had been the helpless Mouse. And it came about that his life was to be saved by the keeping of the promise he had ridiculed.

5. He was caught by some hunters, who bound him with strong rope, while they went away to find means for killing him.

4. 其れから間もなく獅子大王が丁度此の可哀相な鼠が遭つた様な酷い目にあひました。そして先きに自分が馬鹿にした、あの約束を鼠が守れば獅子の命は助かるといふ有様になりました。

5. といふのは獅子が獵人に捕はれたのです。獵人は獅子を強い綱で縛つて置いて、獅子を殺す獲物を取りに行きました。

第二卷第九号（明治四二年九月一日）

### ÆSOP'S FABLES.

#### いそつぶ物語 詳解

（第 九）

長 谷 川 元 吉

#### VIII.— The Lion and the Mouse.

6. Hearing his loud groans, the Mouse came promptly to his rescue, gnawed the great rope, and set the royal captive free.

7. "You laughed," he said, "at the idea of my being able to be of service to you. You little thought I should repay you. But you see it has come to pass that you are as grateful to me as I was once to you."

8. The weak have their place in the world as truly as the strong.

#### IX.— The Mouse, the Cat, and the Cock.

1. A young Mouse, that had not seen much of the world, came home one day and said, "Oh, mother! I have had such a fright! I saw a great creature strutting about on two legs. I wonder what it was! On his head was a red cap. His eyes were fierce and stared at me, and he had a sharp mouth.

#### VIII.—獅子と鼯鼠との話。

6. 獅子が大きな声で唸つて居るのを鼠が聞きつけ、直ぐ様救ひに来て、太い綱を噛み切つて放してやりました。

7. 其の時鼠が申しましたには、『獅子様あなたは私が御恩報じをしますと言つた時に私の様な者が何の役に立つものかと思つて御笑ひになりました。私が御恩返しをするなど、は夢にも御思ひなさなかつたけれども、御覧なさい、此間私があなたに対して有難く思つた様に、今日はあなたが私に対し有難く思ふではありませんか。』

8. 世の中は、強いものだけでなく弱い者も、相応に自分の立場があるものだ。

#### IX.—鼯と猫と鶏との話。

1. まだ世の中をあまり見た事の無い若い鼯が或る日外から帰つて来て申しましたのは、『まあ、おツか様、僕はほんとに驚愕したの。二本の足で威張つて歩く大きなものを見ましたが、あれは一体何だつたでせう。頭には赤い帽子を被ぶつて居ました。眼は鋭い眼、其れでもつて僕を睨み付けたの。そしてまた其の口は尖がつて居



6. The next time the Frog from the pond came to visit his friend, he could not find him.

"Too late!" sang a Bird, who lived in a tree that overhung the pool.

"What do you mean?" said the Frog.

"Dead and gone!" said the Bird. "Run over by a wagon and killed, two days ago, and a big Hawk came and carried him off."

7. "Alas! if he had only taken my advice, he might have been well and happy now," said the Frog, as he turned sadly towards home; "but he would have his way, and I have lost my friend."

8. Wilful people will not listen to reason.

\* Stickney の原本では終止符。

6. 其後再び池の蛙が会ひに来た時には沼の蛙は居ませんでした。沼の上にかぶさつて居る木の鳥\*が囀つて『もう遅い』と申しました。『何んだツて』と蛙が言ひますと鳥\*が申しましたには『もう死んぢまつたよ。車にしかれて、二日前に、そして大きな鷹が来て持つて行つちやつたよ。』

7. 『まあ、僕の忠告を聞きさへしたなら今も丈夫で楽しく暮して居たらうのに、彼奴は自分の思ひ通りにして聞かなかつたから、僕も友達を失つた』と言つて池の蛙は悲しさうに帰つて行きました。

8. 我の強い人<sup>が</sup>には道理を言つても聴き入れない。

\* 「鳥」は「烏」の誤植か。

第二卷第八号（明治四二年八月一日）

## ÆSOP'S FABLES.

### いそづぶ物語詳解

(第 八)

長 谷 川 元 吉

#### VIII.— The Lion and the Mouse.

1. It once happened that a hungry Lion woke to find a Mouse just under his paw. He caught the tiny creature, and was about to make a muthful of him, when the little fellow looked up, and began to beg for his life.

2. In most piteous tones the Mouse said, "If you would only spare my life now, O Lion, I would be sure to repay you!"

3. The Lion laughed scornfully at this, but he lifted his paw, and let his brave prisoner go free.

#### VIII.—獅子と麤鼠との話。

1. 或る時空腹<sup>すきばら</sup>の獅子がふと眼を覚まして見ると丁度自分の足の下に麤鼠<sup>はつかねづみ</sup>が居りました。そこで獅子は小さな鼠を掴まへて一口に食べようとしたらば、鼠は見上げてどうぞ助けて下さいと言ひ掛けました。

2. 鼠は実に憐れな声で申しますには『おゝ獅子様、今私の命を助けてさへ下されば、きつと御恩報<sup>つか</sup>じは致します』。

3. 獅子は此を聞いて嘲笑<sup>あざわら</sup>ひましたが、足を挙げて大胆な鼠を放してやりました。

1. Once there were two Frogs who were dear friends.

2. One lived in a deep pond in the woods, where the trees hung over the water, and where no one came to disturb him.

3. The other lived in a small pool. This was not a good place for a Frog, or any one else, to live in, for the country road passed through the pool, and all the horses and wagons had to go that way, so that it was not quite like the pond, and the horses made the water muddy and foul.

1. 或る時仲好しの二匹の蛙が居ました。

2. 一匹の蛙は森の中の深い池に住まつて居ました。其池は木が水の上へかぶさつて居てそして誰も蛙の邪魔に来る者は有りませんでした。

3. 今一匹の蛙は小さい沼に住んで居ました。此沼は蛙だけでなく誰が住まふにも善い所ぢやありませんでした。といふのは田舎道が此沼を通り抜けて居て、馬や車は皆んな其道を通らねばならなかつたから、森の中の池とは事かはり、此所は馬の通行で水が濁つて汚なくなつて居ました。

第二巻第七号（明治四二年七月一日）

#### ÆSOP'S FABLES.

#### いそつぷ物語詳解

（第 七）

長 谷 川 元 吉

#### VII.— The Two Frogs.

4. One day the Frog from the pond said to the other, "Do come and live with me:\* I have plenty of food and water, and nothing to disturb me; and it is so pleasant in my pond. Now here there is very little food, and not much water, and the road passed through your pool, so that you must always be afraid of passers-by."

5. "Thank you," said the other Frog; "you are very kind, but I am quite content here. There is water enough; those who pass never trouble me; and as to food, I had a good dinner day before yesterday. I am so used to this place, you know, and I do not like change. But come and see me as often as you can."

#### VII.—二匹の蛙の話《つゞき》

4. 或日池の蛙が沼の蛙に言ひますには『君、うちへ行つて僕と一所に居よう。僕は食べ物も水もどツさり有るし、何も邪魔をするものは無し、僕の池はそれや愉快だぜ。所が此所は食べ物少しいし、水は多く無いし、それに道路が君の沼を通り抜けて居るから君は始終<sup>しよつちう</sup>通行人を恐はがつて居らねやならん。』

5. そこで沼の蛙が申しますには、『有り難う。君は親切に左う言つて呉れるけれども僕は此所で充分満足して居る。水も飲むだけ有るし、通る人も僕の邪魔をしない、食べ物はどうかといへば、一昨日御馳走を食べた。君、僕は此所に久しく住みなれて居るのだらう、だから越し度くはないよ、けど、ちよいちよい遊びに来て呉れ給へ。』

1. A Drum was once boasting to a Vase of Sweet\*<sup>1</sup> Herbs in this way: "Listen to me! My voice is loud and can be heard far off. I stir the hearts of men so that when they hear my bold roaring, they march out bravely to battle.\*<sup>2</sup>

2. The Vase spoke no words, but gave out a fine, sweet perfume, that filled the air, and seemed to say: "I cannot speak, and it is not well to be proud, but I am full of good things that are hidden within me, and that gladly come forth to give cheer and comfort. But you, you have nothing in you but noise, and you must be struck to make you give that out. I would not boast if I were you."

\* 1 Stickney の原本では sweet と小文字。

\* 2 Stickney の原本にはある二重引用符が脱落している。

#### VI.— The Wolf and the Goat.

1. A Wolf saw a Goat feeding at the top of a steep precipice, where he could not reach her. "My dear friend," said the Wolf, "be careful! I am afraid you will fall and break your neck. Do come down to the meadow, where the grass is fresh and green."

2. "Are you very hungry?" said the Goat. "And is it your dinner-time? And would you like to eat me? I think I will not go down to the meadow to-day, thank you." And she capered about on the edge of the rock, still looking down at the greedy Wolf.

3. To give a false reason is to practice deceit.

#### VII.— The Two Frogs.

1. 太鼓が或る時好い香のする草花を活けた花瓶に向つて、斯ういふ風に自慢を言ひました、『こら、お聞きよ。己れの声は大きくて遠くまで聞える。己れは人の心を扇動<sup>おだ</sup>てるから、己れの大きな怒鳴りを聞くと人々は勇ましく戦争に進んで行く。』

2. 花瓶は何とも物を言はなかつたが、其所いら一ぱいになる様な誠に好い香を放つて、斯う言ふ様でした、『私は話は出来ません、それに威張るのは善くありません。けれども私は私の中の方には善い事が一ぱい有ります。そして其の善い事は喜んで出て来て人様を喜ばせ且つ慰めます。所が貴下はどうです、貴下はドンドン騒ぐ事より外に何んにも知らない、そして貴下<sup>あなた</sup>に其喧しい声を出させるには、貴下は打たれなければやならない。若し私が貴下であつたら、自慢はしなかつたでせう。』

#### VI.— 狼と山羊との話。

1. 山羊<sup>やぎ</sup>が峻しい崖の頂で草を食べて居るのを狼が見ましたけれども、其の傍<sup>そば</sup>へ行けなかつたので狼が申しましたのには『やあ、山羊さん気をお付けなさい、落ツコツて頸を挫くといけない。下りてらツしやい、新しい青草の生へて居る草原へ。』

2. 山羊は答へて言ひますには『貴下<sup>おなか</sup>は御腹が減りましたか。今貴下<sup>ごはんとき</sup>の御飯時なんですか。それで 妾<sup>わたし</sup>をめしあがり度い<sup>を</sup>のですか。有り難う御座いますが今日は妾は下りますまい。』

3. そして山羊はなほも欲張の狼を見下ろしながら、崖の縁を跳ね廻つて居ました。

4. 虚偽の口実を言ふのは人を欺くに同じだ。

\* 英文の 2 が和文では 2、3 に分かれている。

#### VII.— 二匹の蛙の話。

them.

6. After a few days the owner of the field came again, and the eager birds listened to get more news for their mother.

7. "Since our neighbours have not come," the farmer said, "go and ask your uncles and cousins to come and help us, for our wheat is ready to harvest."

8. "We must move now! we must surely move!" said the young Larks, "or the reapers will come and kill us all."

9. "Not yet," said the mother; "the man who only sends to his friends to help him is not to be feared; but watch and listen, if he comes again."

10. And by and by he came. Seeing the wheat so ripe that it was shedding its grain, he said, "To-morrow we will come ourselves and cut the wheat."

11. And when the birds told this to their mother, she said, "It is time now to be off, my children, for the man is in earnest this time. He no longer trusts to others to do his work, he\* means to do it himself."

*Self help is the best help.*

\* he は Stickney の原本では but とある。

6. 二三日経つてから農夫が復た来ましたので、子雲雀は母鳥にまた話さうと思つて、熱心に耳を傾けて聞いて居ました。

7. すると農夫が申しますには「麦はもうすつきり実つて刈り取れるのに近所の人達が来ないから叔母様や従兄弟の所へ行つて手伝に来る様に頼んで呉れ」。

8. 「引越<sup>ヒツコシ</sup>しなくちやならない、もう、どうしても引越<sup>ヒツコシ</sup>しなくちやならない。そうしなけや刈手が来て私等をみんな殺してしまふ」と子雲雀は申しました。

9. すると母鳥は「まだ大丈夫です。手伝を呼びにやる様な人は恐はいもんぢや有りません。だが、もし復た来たらば何う言ふかよく気を付けて聞いてお置き」と申しました。

10. それから程なく農夫が来ましたが、麦の粒が溢れる程熟して居たので、「明日は私等が自分で来て刈らう」と申しました。

11. 子雲雀が此を母鳥に話しますと、母鳥は申しますには「さあもう越すべき時ですよ、今度は農夫は真面目だから。あの男はもう自分の仕事を人にまかして置かないで自分でする考なんです。」

自助は最良の助である。

第二卷第六号（明治四二年六月一日）

## ÆSOP'S FABLES.

### いそつぶ物語詳解

(第 六)

長 谷 川 元 吉

#### V.— The Drum and the Vase of Sweet Herbs.

#### V.— 太鼓と花瓶との話。



ÆSOP'S FABLES.

いそづぶ物語詳解

（第 四）

長 谷 川 元 吉

IV.— The Lark and Her Young Ones.

1. A Lark had made her nest in Spring in a field of young, green wheat. Her little ones had been growing larger and stronger all the Summer, while the wheat grew taller and closer about their home.

2. As Autumn drew near, the young birds were almost old enough to fly, and the wheat was nearly ripe.

3. One day the owner of the wheat-field came by, and the little Larks heard him say to his son, "Here will be a fine harvesting of wheat. I must send to all my neighbours to come and help me gather it in."

4. This startled the birds. They could hardly wait for their mother to come home to move them to a place of safety.

IV.—雲雀と子雀雲（ママ）の話

1. 或る雲雀が、春のうち、まだ若くて青い小麦畑に巣を造りました。其の子雀雲（ママ）は夏中だんだん成長しましたが、畑の麦も追々伸びて雲雀の家のまはりへずんずん詰めかけて来ました。

2. 秋が近くなつて、小雲雀はもう大概飛べる様になり、麦も余つ程実りました。

3. 或る日畑の持主がやつて来て、其の息子に向つて『これや麦がうんと穫れるよ近所の人に皆刈入れの手伝に来て貰ふ様に使をやらねばなち（ママ）ぬ』と言つたのを小雲雀が聞きました。

4. 此を聞いて小雲雀は驚愕<sup>びつくり</sup>しまして、母鳥<sup>おやどり</sup>が帰つて安全な場所へ移して呉れるのを待ち兼ねて居ました。

ÆSOP'S FABLES.

いそづぶ物語詳解

（第 五）

長 谷 川 元 吉

IV.— The Lark and Her Young Ones.

5. "There is no need for moving yet, my children," said the mother. But when she left them, as usual, the next morning, she charged them to listen to what the farmer said, if he came again, and to remember so as to tell her exactly what it was, when she came back to

IV.—雲雀と子雲雀との話（つゞき）

5. 「お前達、まだ移るに及びません」と申しました。けれども其の翌朝、母鳥が平常<sup>いつも</sup>の如く、出掛ける時に「農夫が復た来たらば、何と言ふかよく聞いてすツかり覚えて居て、私が帰つた時教へて呉れ」と言ひ付けました。

ÆSOP'S FABLES.

いそづぶ物語詳解

（第 参）

長 谷 川 元 吉

III.— The Dog and His Shadow.

1. A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others\* that it had been given him by a butcher, which we will hope was the case.

2. Dogs like best to eat at home, and he went trotting along with the meat in his mouth, as happy as a king.

3. On his way there was a stream to cross, and as the water was still and clear, he stopped to take a look at it. What should he see, as he gazed into its bright depths, but a dog as big as himself, looking up at him, and lo ! the dog had meat in his mouth.

4. "I'll try to get that," said he ; "then what a feast I shall have." As quick as thought he snapped at the meat, but in doing so he had to open his mouth, and his own piece fell to the bottom of the stream.

5. Then he saw that the other dog had lost his piece, too. He went sadly home. That day he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were?

\* Stickney の原本では others の後にコンマがある。

III.— 一犬と其の影うまとの話きれ

1. 或る時犬が旨い肉を一片持つて居て御飯の時の御馳走にしようと思つて居ました。其れは犬が盗んだのだと言ふ人も有りますが、又肉屋で貰つたのだと言ふ人も有ります。貰つたのなら結構です。

2. 犬といふものは自分のうちで食べるのを最も好みます。それで其の犬は肉を啣へて、王様にも成つた様に喜びながら急いで帰りました。

3. 途中に小川が有つて渡らねばならなかつたが水が余り澄んで居るので犬は立ち止まつて流れを一寸覗いて見ました。ぴかぴか光る水をぢつと見詰めると、其れはまあ丁度自分と同じ程の大きい犬が自分を見上げて居ます、そして見給へ、其犬は肉を啣へてるぢやありませんか。

4. 『どれ彼の肉を取つてやろう。そうすれや大変な御馳走が食べられる』と言つて、犬は矢庭に其肉に喰ひ付かうとしました。けれども其うするには口を開けなければならなかつたので、自分の啣へて居た肉が川底へ落ちてしまひました。

5. そこで彼は、もう一匹の犬も肉を無くした事が解りました。そしてしほれて家へ帰つて行きました。其日は此の犬は大層御馳走を食べました……だが御馳走といふ考を食べたので本当の食べ物では無かつたのです。あなた方は此の考は何んなものだと思いますか。

Coming closer to the Lamb, he said.\*<sup>2</sup> "You little wretch, if it was not you, it was your father; so it's all the same," and he pounced upon the poor Lamb, and ate her up.

\* 1 第二号で「him は her の誤植」と訂正する。Stickney の原文でも「him」。

\* 2 Stickney の原本ではコンマ。

『馬鹿野郎、其れや貴様で無かつたら、貴様の親父だつたんだ。だから、何つちでも同んなじだい』。と言つて、不憫な仔羊を攫み捕つて、食つてしまひました。

第二卷第二号（明治四二年二月一日）

## ÆSOP'S FABLES.

### いそづぶ物語詳解

（第 貳）

8. When people mean to do bad and cruel things, they can easily make excuses for it.

#### II.— The Fox and the Lion.

1. A little Fox was out playing one day, when a Lion came roaring along. "Dear me," said the Fox, as he hid behind a tree, "I never saw a Lion before. What a terrible creature! His voice makes me tremble."

2. The next time the Fox met the Lion, he was not so much afraid, but he said to himself.\* "I wish he would not make such a noise!"

3. The third time they met, Fox was not frightened at all. He ran up to the Lion, and said, "What are you roaring about?" And the Lion was so taken by surprise, that he walked away without saying a word.

~~~~~  
【前号正誤】 原文 2. 第二行 him は her の誤植。

\* Stickney の原本ではコンマ。

長 谷 川 元 吉  
8. 悪い残酷い事を為ようと思へば容易に其の口実を拵へられるものである。

#### II.— 狐と獅子との話

1. 或る日小狐が外で遊んで居ると獅子が咆哮ながら遣つてきました。狐は木の陰へ隠れて『オヤオヤ、己れは此れまで獅子といふものを見た事が無かつたが、まあ恐ろしい奴だ、彼奴の声を聞くと体が戦慄へる』と申しました。

2. 其の次に狐が獅子に出遭つた時には其んなに恐怖がらないで「彼んな大きな声をしなければいいのに」と独語を言ひました。

3. 三度目に遭つた時には狐はちつとも驚きませんでした。づかづか獅子に近寄つて『お前は一体何を咆えて居るのか』と申しました。すると獅子はあんまり不意を食らつたので一語も言はずに逃げてしまひました。

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 壱）

長 谷 川 元 吉

狼と仔羊との話

The Wolf and the Lamb.

1. One day a Wolf and a Lamb happened to come at the same time to drink from a brook that ran down the side of the mountain.

2. The Wolf wanted very much to eat the Lamb, but meeting him\*<sup>1</sup>, as he did, face to face, he thought he must find some excuse for doing so.

3. So he began by trying to pick a quarrel, and said angrily,—

"How dare you come to my brook, and muddy the water so that I cannot drink it? What do you mean?"

4. The Lamb, very much alarmed, said gently "I do not see how it can be that I have spoiled the water. You stand higher up the stream, and the water runs from you to me, not from me to you."

5. "Be that as it may," said the Wolf, "you are a rascal all the same, for I have heard that last year you said bad things of me behind my back."

6. "Oh, dear Mr. Wolf," cried the poor Lamb, "that could not be, for a year ago I was not born."

7. Finding it of no use to argue any more, the Wolf began to snarl and show his teeth.

1. 或る日 図らずも狼と仔羊とが山を流れる小川の水を飲みに来合しました。

2. 狼は大変仔羊を食ひ度かつたけれども、まさか顔を合せて見ると、何か其の口実を拵へねばならぬと思ひました。

3. そこで、先づ喧嘩を吹っ掛けようとかいつて、声荒く、『よくも貴様は己れの川へ来て、斯んなに水を濁らしたな、己れは飲めやしない。一体何ういふ積りだ。』と言ひますと、

4. 仔羊は喫驚して、やさしく申しますには『何うして私が水を濁らしたといふ事が有りませうか。貴君は私よりも川上に立つて入らつしやるから、水は貴君の方から私の方へ流れて来るので、私の方から貴君の方へ流れるのぢや有りませんもの』。

5. 『其れやさうとしても、貴様はやつぱり悪る者なんだ。何故ツてば、貴様は去年己れの居ない所で悪口を言つたそうだぜ。』と狼が申しました。

6. 可愛相に、仔羊は叫んで、『あら、まあ、狼さん。其んな筈は有りません。私は一年前には未だ生れて居なかつたんですから』。と言ひました。

7. もう議論しても無益だと知り、狼は齒を剥き出して唸り出し、仔羊に近寄りながら、